# 機動戦士ガンダムSCRYED

オズワルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動戦士ガンダムＳＣＲＹＥＤ

【Ｎコード】
Ｎ６２９４Ｕ

【作者名】
オズワルト

【あらすじ】
もしも、ガンダムＳＥＥＤの主人公がキラ・ヤマトではなく、スクライドの主人公、男の中の漢、カズマだったら？
そういう作品です。配役もガンダムＳＥＥＤのからスクライドへとちょいちょい変えてます。そのままのキャラもいますが。
ストーリーは大体ＳＥＥＤをを元に、後はオリジナルでいこうと思ってます。
熱い漢のためのガンダムを楽しんでください（笑）
五歳児並みの知能のカズマに、ＭＳ操縦できるわけねーだろ！って

ツッコミは無しの方向で

# 対峙

コズミックイラ71年、ザフト軍と地球軍の戦争は続いてた。
ザフト軍とはプラントと言う、コーディネーターが暮らしているコロニー群の名称だ。国のようなものでもある。
コーディネーターは遺伝子調整された者の事を指す。受精卵の段階で才能をより高めるようにコーディネートされた人間。だからコーディネーター、というのが一般の考え方だ。逆に、遺伝子調整をされていない人間をナチュラルと呼ぶ。
コーディネーターとナチュラルは対立していた。それは、必然だったのかもしれない。
ナチュラルが年単位で習得する事を、コーディネイターは僅か一ヶ月足らずで習得してしまう。あるいは、もっと早く。遺伝子操作された優れた者。そうでない者は、生まれた瞬間から並みの努力では到底埋めることのできない差を付けられてしまっている。
だから戦争が起こったのだ。コーディネイターを認めたくないナチュラルと、そう産まれてきてしまったコーディネイター。両者の間の溝は、永遠に埋まる事はないかもしれない。
地球軍とザフト軍の戦いは膠着状態へとなっていた。
誰もが疑わなかった、数で勝る地球軍の勝利。しかしザフトはその技術力で戦闘用ＭＳを開発、数の差を兵器の差で埋めていた。
地球軍は、鹵獲したザフトＭＳを元に、中立コロニー、ヘリオポリスで新型ＭＳを開発進めていた。
ある人物からその情報をリークされたザフト軍は、新型ＭＳ五機の奪取を計画、ヘリオポリスの襲撃を行った。

そして、二機は対峙していた――

カズマは今までに感じた事の無いものを感じていた。
――なんだ。毛穴って毛穴が開いちまってる。この感覚は何だ？
操縦桿を握る手には、汗が滲んでいた。カズマの鼓動は早くなり、全身が軽く震えていた。
コックピットに座るカズマの視界には、赤いＭＳが映っていた。それは地球軍が極秘裏に開発していたＭＳ、ＧＡＴＸ－３０３イージス。カズマの乗る機体は、同じく地球軍の開発していたＭＳ、ＧＡＴＸ－１０５ストライク。
――何にしろわかるのは、この状況がとてつもなくヤベェってことだ。
イージスには赤いパイロットスーツに身を包んだ、ザフト軍の男が乗っていた。
男は冷静に、表情を変えず、ストライクを見据えている。
イージスがビームサーベルを引き抜いた。そして、ゆっくりとストライクに向かって、歩み寄る。
カズマはそれに対抗し、ストライクにアサルトナイフを握らせた。
「うおおぉぉぁあ！！」
カズマはストライクを疾走させる。アサルトナイフを振りかざし、イージスに切りかかる。
だが、それはかわされた。完璧に見切られていた。
――こいつ！
イージスがビームサーベルを振るった。ストライクの右肘が切断される。
コックピットの中を衝撃が襲った。

「ぐあっ！」
カズマがたまらなく叫んだ。操縦桿を握る手が緩む。
イージスはストライクに対し、蹴りを叩き込んだ。ストライクは抵抗できず、住宅街にその巨大な鋼鉄の身体で倒れこむ。
――あっさりかわしやがった。あっさりと！
イージスがストライクに頭部に設置されたバルカンを打ち込む。ストライクの装甲はフェイズシフト装甲という、装甲にダメージを受けないような、特別な装甲だ。電力の続く間、ストライクはいくら物理的攻撃を受けても、その装甲は傷つかない。
しかし、衝撃はそのまま襲ってくる。フェイズシフト装甲の維持に、電力も必要となる。
絶え間ない痛みをコックピット内のカズマは感じていた。
蹴り飛ばされた時の衝撃で、カズマの頭部からは血が出ていた。そこが振動のたびに刺激される。頭をハンマーで殴られているかのような痛み。それでも、カズマは抗おうとしていた。
――調子に乗りやがって……
カズマは操縦桿を握り、ストライクを起き上がらせた。
装備はなかった。アサルトナイフは全て喪失し、バルカンも打ちつくしていた。あるのはその機体だけ。
「うおらぁあああ！！」
ストライクは丸腰でイージスに殴りかかった。
だがそれは、先程と同じように見切られている。イージスは最小限の動きでストライクの攻撃を回避する。
ストライクの態勢は崩れ、地面に叩きつけられた。コックピットが揺れる。カズマの頭部の傷口が開く。血が流れ出る。それでもカズマは抗う事を止めない。
カズマの痛みは強く、その思いも強かった。
カズマはストライクを立ち上がらせる。抗う為に。目の前の赤いＭＳを倒す為に。
何度でも、何度でも。

## ヘリオポリス　１（前書き）

この作品は、スクライドのキャラとＳＥＥＤのキャラがごっちゃになってます
設定も大分変えてますが、その辺は大目に見てください。
なるべくスクライド本編で使われてる言葉を出そうとしてみたり。

# ヘリオポリス　1

数時間前。
コロニー、ヘリオポリス。
中立国家であるオーブの所有しているヘリオポリスは、外の世界で起きている戦争とは無関係だった。
平穏な毎日、外の世界の人間が忘れつつある、あたりまえの日常。
それが、ここにはあった。
「っだあ！なんなんだよ、これ！」
ジャンパーを着た青年が叫ぶ。その声は周囲へと盛大に響いた。
ここはヘリオポリス内の、緑溢れる、工学カレッジの一角。正門から校舎へと続く通路のすぐ側にある机に座っているのは、さきほど大声を上げた青年だ。青年と言うのは少し、違うかもしれない。大人になりつつあるその顔には、僅かに幼さを残していた。
その男、名前をカズマと言う。
苗字はない。ただのカズマ。戸籍はあるが、出身地はわからない。ヘリオポリスに来たのも、成り行きだった。ただ、その本名かどうかもわからない名前と顔立ちから、日系なのではないか、というのだけえは想像できた。
「あのボンクラクソジジイ、こんな大量に訳わかんねえモン出してきやがって！ふざけんな！プログラム処理だぁ？そんなもんできなくたって、ＭＳは動かせるじゃねえかよ！」
カズマは頭を掻き毟った。机の上には山積みのプリントがある。そのどれもが殆ど白紙だった。何も書かれていない代わりに、紙にはいくつもの折り目が付いている。破れている箇所もある。
ただ、そんな悪態をつきつつも、カズマは目の前の課題をやらな

いわけにはいかなかった。死活問題なのだ。課題を提出しなければ、カズマはダブり――ようするに、留年してしまう。
カズマは手に持っていたシャープペンシルを投げ捨て、天を仰ぐ。
「カズくん、まだぁ？」
隣に座っていた、幼い少女が退屈そうに聞いてくる。名前は由詑かなみ。当たり前だが、工学カレッジの学生ではない。オレンジ色の独特の服を着た少女だった。カズマとは一緒に暮らしている。両親はいない。カズマと同じく、出身はヘリオポリスではない。
「今日は一緒にどこかに行くって約束だったのに」
「いや、俺だってねえ、こんなことしたくねぇよ！でもな、かなみ。大人には大人の事情ってやつがあってよ……」
「それって、カズくんが頭悪いからやらなきゃいけないんでしょ？」
かなみにそう言われ、カズマは黙ってしまう。
そうなのだ。カズマの目の前にある大量の課題は、本来ならやらなくてもいい。成績の悪すぎるカズマにだけ、教授が与えた課題なのだ。
しかも、課題の難易度事態はそう高くない。教授の温情が溢れている課題だった。ある程度の工学の知識があれば、一枚に十分とかからない。工学カレッジに通う学生ならば、五分あれば終わらす事ができる。
カズマが未だに課題を終えていないのは、プログラミングの授業を寝て過ごしているからだ。
「うだつの上がらない、能無し野郎？」
かなみはその姿に似合わない言葉を口にする。
「そうねぇ……」
「甲斐性無しの、ロクデナシだ」
「そうねぇ……そこに、クズとウスノロを足してもいいよ」
うなだれるカズマ。呆れたようにため息をつく、かなみ。
何人もの若者たちが、二人の前を通り過ぎていく。コロニー内に作られた人工的な、されど優しい日差しを受け、楽しく談笑しなが

ら歩いていく。
その中の一人がカズマに気がつき、声をかけた。
「よっ、カズマ」
バイクを引きながら、二人の方へと寄ってきた。先程までは脚を揺らしていたかなみが、急にしおらしくなる。それはこの男が苦手だから、というわけではなく、単に人見知りだからだ。
「なんだ、君島か。俺は今忙しいから、とっとと帰れ」
君島と呼ばれた男は、薄いジャケットを羽織り、その下にオレンジ色のシャツを着ていた。下は灰色のズボン。頭にはヘルメットとゴーグルが付けられていた。
「いきなりそれかよ。ひでぇなあ。ちょっとくらい、手伝ってやってやろうと思ったのに」
「マジでか！？恩に着る！じゃあ、これ、頼むぜ」
カズマは横に積まれた大量の課題、その全てを君島に差し出した。
「そんなにやらねぇよ！ちったあ、自分でやってみたらどうなんだよ」
「考えてこれなんだよ……」
自らの前にあるプリントに、カズマは視線を落とす。それは見事に白紙だった。
「……なんだこれ」
君島はそれをみて、不思議そうな声を出す。
「これが課題なのか？」
「ああ、そうだよ」
君島は徳江の上に投げ捨てられていたシャープペンシルを手に取る。そして、白紙のプリントを瞬く間に埋めていった。カズマはそれに感激し、君島の手を取る。
「おお、すげえな、君島！」
「……こんなの、その辺のガキでもできるっての」
君島が小さな声で呟く。ガキでもできる、というのは間違いではない。少しプログラミングに興味のある子供ならば、それくらいは

知っていた。
「何か言ったか？」
カズマが問う。それに対し、君島が別に、と口にしようとした時、一人の女性が三人の前に表れた。
その姿を見て、君島が歓喜の声を上げる。かなみは軽く会釈をし、カズマは頬杖をつく。君島の態度を見て、呆れていた。
「久しぶりね、カズマ」
「ん、ああ。えっと、確かあんたは――」
次の言葉が出てこない。
「あやせよ。寺田あやせ」
「そうだった。悪い。名前覚えるの、苦手でよ」
寺田あやせは君島と同じような薄いジャケットを羽織っていた。白いシャツを中に着ている。君島の格好と似ていた。偶然なのだろうか。
「悪い、カズマ。手伝えなくなった」
君島はしれっとそんな事を言う。ふざけんな、とカズマが叫んだが、聞く耳を持たない。
「あやせさん、どこに行きます？俺はあやせさんの行きたい所なら、どこでもいいですよ」
「今日は私、講義聞きに来たから、あまり時間ないわよ？」
「いいんです、いいんです。俺、待ってますから。講義、どんなの取ってるんですか？俺も一緒に途中まで行きますよ」
「でも君島くん、あなた、カズマと何か……」
「いいんです、いいんです、あんな馬鹿、ほっておいて。俺はあやせさん一筋ですから。さ、行きましょう行きましょう」
君島はあやせと共に、去っていった。机の上に大量の課題とシャープペンシルを置いて。
結局、一枚のプリントが終わっただけだった。その他はなにも進んでいない。時間を無駄にしていた。確実に。
「それ、いつまでにやらなくちゃいけないの？」

かなみが聞いてくる。カズマと二人っきりとなった今は、緊張している様子はない。
「……今日の二十時」
「今、十二時だね」
「……うん」
「間に合うの？」
「……だーっ！君島のバカヤロォー！」
カズマの声が、再度カレッジに響いた。
そんな当たり前の、日常が続くと誰もが思っていた。続くはずだった。
しかし数時間後、日常は崩れ去っていく。

# ヘリオポリス　2

広大な宇宙を、四機のＭＳが駆けていた。ザフト軍の量産型ＭＳ、ジン。コーディネイターの優秀すぎる頭脳が生み出した、全く新しい形の兵器。

それを追うのは三機の宇宙用戦闘機のＭＡ。地球軍ではメビウスと呼ばれるそれは、ジンの兵器としての性能と比べれば圧倒的に見劣りする。だが、その内の一機、オレンジ色にカラーリングされたメビウスは違った。

「ハッハッハー！遅い遅い遅い遅い遅い遅い！」

その機体のパイロットの名前は、ストレイト・クーガー。地球軍において、「世界最速の男」というとおり名を持つ男。その機体である、メビウス・ゼロは通り名に恥じない「速さ」を持っていた。

「ビリー、マシュー、お前らは戻ってアークエンジェルを守れ！こいつらは俺が面倒を見る！」

クーガーは見方に声をかけ、操縦桿を押しやった。

通常のメビウスとは全く別物の加速力をみせるそれは、瞬く間にジンに追いつく。クーガーはたった一機で四機のジンに戦いを挑もうとしていた。

このメビウス・ゼロは、ストレイト・クーガー専用にカスタマイズされた機体だ。。

メビウス・ゼロとは卓越した空間把握能力を持つものだけが扱える、ガンバレルシステム持つ機体だ。取り付けられた四つのガンバレルを本体から切り離し、それを制御することによって、変幻自在の射撃を可能にするシステム。有線を必要とするものの、強力な装

備だ。
　クーガーのメビウス・ゼロはガンバレルだけではなく、巨大な加速装置を積んでいた。常人ならばその異常な加速力によって生み出されるGに耐える事ができず、桁違いの速さの中での判断が追いつかない。
　ジンのうちの一機が、メビウス・ゼロに向かってサブマシンガンを放つ。
　クーガーは強烈な相対速度を感じているにも関わらず、楽々とそれを避ける。そして、交錯する際、近距離から対装甲リニアガンを撃ちこんだ。ジンの胴体をそれが貫通し、爆発する。
　残りのジンが臨戦態勢にはいる。どうやら逃げ切れないと判断したようだ。一体三。圧倒的に不利な状況だ。しかし、この状況でクーガーは笑っていた。
「寄って集って群れてつるんで、それで俺の速さをどうにかできると思うなよ！」
　クーガーがガンバレルを展開させた。超加速に追いつけるように、同じくカスタマイズされたガンバレル。それが生き物のようにうねり、ジンを左右上下前後斜めから狙い打つ。
　三機のジンはそれを避けるのに意識を向けた。それほどまでに高速で、正確な射撃だった。
「貴様らに足らないものを教えてやろう！それは！」
　メビウス・ゼロ本体に装備されている、対装甲リニアガンを放った。二機目のジンが爆散する。それに一瞬、気を取られた三機目のジンが、ガンバレルの餌食となった。
「情熱思想理想思考気品優雅さ勤勉さ！」
　あっという間に三機のジンを撃退、残りは一機のみとなった。
「そして何よりも――！」
　あまりにも圧倒的な実力差を見せられてうろたえるジンに、クーガーは四方からガンバレルを、そして対装甲リニアガンをぶち込む。
　ジンはなんとかサブマシンガンの引き金を引いて応戦するも、し

かしそれはガンバレルにもメビウス・ゼロにも当たらない。
「速さが足りない！」
ガンバレルから放たれた弾丸が、そしてリニアガンが、ジンを貫いた。
クーガーはたった一機で四機のジンを撃墜していた。これが、「世界最速の男」、そして地球軍最強兵士の実力であった。
メビウス・ゼロは高速のまま大きく旋回すると、巨大なコロニーへと進路を向けた。
そこではいくつかの光が瞬いている。戦闘の光だ。
「やはり始まっていたか」
クーガーはメビウス・ゼロを最大に加速させ、目的地へと向かう。
戦火に巻き込まれた、ヘリオポリスに。

## ヘリオポリス　2（後書き）

一応書いてますが、このメビウス・ゼロは特殊仕様で、通常のガンバレル四つにさらに大型加速装置をつんでいるという、「途轍もなく速い」メビウス・ゼロですw
速くなければ兄貴じゃない。

## ヘリオポリス　3（前書き）

ザフト軍側です

ザフトの赤五人組は全員ホーリーから拝借しました。

## ヘリオポリス　3

その頃。ヘリオポリス内部。
五人の赤いパイロットスーツを着た人間が、ヘリオポリス内の薄暗い通路を進んでいた。所々には死体が転がっている。頭や心臓から血を流し、紛れも無く絶命していた。
「もう、最悪。こんなところから進入しなくちゃならないなんて」
その内の一人、シェリス・アジャーニが口を開いた。青い髪の、ショートヘアの少女だ。
しかし、その身に纏っている赤のパイロットスーツは、軍事アカデミーを高成績で卒業した一部の人間にしか与えられないものだ。コーディネイターで構成されているザフト軍の中でも、エリートである。
「地球軍の新型兵器の奪還だろぉ？こんなめんどっちい事しねえで、真正面からドカン、とやっちまえばいいんだよ。そうすりゃあ、腰抜けナチュラルなんて、血相変えて逃げ出すだろうが」
そう言ったのは、金髪で浅黒い肌をした、立浪ジョージ。射撃とMSを操縦する腕前はあるが、人格的に少々問題のある人物だ。
「確かに。ナチュラルなんてそんなものですよ。所詮、自分たちより優れた人間を全く認められない人種ですからね」
ナチュラルへの嫌悪感をたっぷりと籠めて、橘あすかは言い放つ。優男、という表現が当てはまる少年だ。しかし、彼もまた、ザフト軍のエリートである。
「静かにしろ。俺たちは任務でここに来ている」
冷静に三人を叱咤するように、劉鳳が言った。凛々しい顔立ちをした青年だ。橘あすかやシェリス・アジャーニとは同年代なのだが、

彼らとは違い、大人びた風貌をしている。
もう一人、全く持って口を閉ざしている男がいる。名前を小林信一郎と言う。
「すみません、劉鳳」
「はぁーい。すみません、隊長」
「ケッ、これだから良い子ちゃんはよ」
その後、五人は口を閉ざし、通路を歩いていく。
それから数分経った頃だろうか。
通路の先に、灯りが見えた。機械の駆動音、作業員の罵声、そしてそこには横たわる五機のＭＳ。
「あれが地球軍の新型ＭＳか」
立浪が呟くように言った。
「全く、本当に中立コロニーであんなものを造っていたなんて……」
「ナチュラルの考えることなんて、そんなものよ」
呆れたように物を言う橘に、シェリスが声をかける。
地球軍が極秘に開発を進めている新型ＭＳ。その情報を掴んだザフト軍のクルーゼ隊の指揮官、ラウ・ル・クルーゼは、それの奪還を劉鳳たち五人に命じていた。
「いくぞ」
劉鳳が飛び出した。その手には拳銃が握られている。
それに続いて、四人が飛び出す。
「ザ、ザフト軍！？」
作業員のうちの一人が叫ぶ。劉鳳はその心臓に、鉛玉を撃ちこんだ。
同様に、何人もの作業員が銃弾に倒れる。正確な射撃だった。さまざまな才能溢れるコーディネイターの中でも、訓練したものにしかできない、精密な射撃。
「これが新型ＭＳ、ね」
シェリスが灰色のＭＳへと走る。両手で拳銃を撃ちながら、コックピットへと潜り込む。

「基本構造はあんまりジンと変わってないのね。パクリじゃない」
レバーを引き、シェリスが偵察・接近戦用ＭＳ、ＧＡＴ－Ｘ２０７ブリッツを起動させた。仰向けに寝ていたＭＳを起き上がらせる。
シェリスはＯＳを開き、それに目を通す。眉が寄った。目の前のデータが、信じられなかった。
「何？これだけのＭＳなのに、こんなしょうもないＯＳなの？」
同様に、橘と立浪もＭＳを起動させていた。
シェリスと同じく、ＯＳを立ち上げる。そして、高速でそれを書き換えていた。
「全く、こんなＯＳしか作れないなんて」
「ナチュラルってのは、そんなもんだろうがよ……一応は、これでいいか」
二機のＭＳが起き上がる。どちらも灰色をしていた。橘は汎用性ＭＳ、ＧＡＴ－Ｘ１０２デュエル。立浪は中遠距離砲撃支援用ＭＳ、ＧＡＴ－Ｘ１０３バスター。
あっという間に三人はＯＳを書き換えていた。不完全だったそれが、比べ物にならにほどの完成度となっている。ナチュラルには到底構築できない、そして使用する事の敵わない、ＯＳ。コーディネイターにしか構築できず扱えないＯＳ。
「劉鳳はまだなの？」
「あいつらなら大丈夫だろ。まがいなりにも、リーダーなんだしよ」
「そうですよ。彼なら問題ありませんよ」
「でも……」
シェリスは迷いを見せる。彼女は劉鳳が心配なのだ。
《構わない。先に行け。俺と小林も、すぐに行く》
劉鳳の声が、シェリスのヘルメットに聞こえてきた。
ＭＳの眼下で二人は銃撃戦を繰り広げていた。そのため、ＭＳへたどり着くのが遅れてしまったのだ。
シェリスは二人を助けようとしたが、あいにくまだ装備の勝手がわからない。うっかり二人を巻き込んでしまったら、洒落にならな

い。
「了解」
しぶしぶ了解し、シェリスはＭＳのバーニアを吹かす。
「じゃあ、先にいてますね、劉鳳」
「そんなやつらに手こずってんじゃねーぞ、リーダー。さっさと来いよ」
橘と立浪もＭＳの推進剤を燃焼させる。三機はヘリオポリス内を飛行していく。ザフト軍の戦艦へ向けて。
奪取された三機のＭＳ。そしてまた、残りの二機も奪われようとしていた。

## ヘリオポリス　3（後書き）

小林信一郎が誰だかわかった人は、かなりのスクライドオタク。
立浪がバスターなのは……お察しください。

## ヘリオポリス　４（前書き）

普通のヤツならやらなそうなことも、カズマならやりそうなんで、書いてて楽しいです。

## ヘリオポリス　4

「大丈夫か、かなみ！」
「う、うん……」
カズマは床に倒れた、かなみを抱きかかえる。膝をすりむき、血が流れていた。そのすぐ側を、何人もの人間が走り去っていく。かなみを抱くカズマの背中に、誰かの足が当たった。謝りもせず、そのまま通り過ぎていく。
ヘリオポリスは攻撃を受けている。それは地球軍が極秘に開発しているＭＳを奪取するためにザフト軍が行っている事なのだが、ヘリオポリスに住んでいる民間人に、それがわかるわけがない。
普段の町並みに、ジンが何機ほど見えていた。中立コロニーに住むものでも知っている。それがザフト軍の兵器であるということは。
なぜジンがこんな場所にいるのか、一般人は知らない。ただ、このままではヘリオポリスが危ない、ということだけははっきりしていた。
ヘリオポリスには一応の武装はあるが、それはたいしたものではないし、ＭＳによる攻撃ならば、防ぎようが無い。内部からなば特に。黙って破壊されるのを待つだけだ。
人々は皆、退避シェルターに向かっていた。それは救難ボートをかねていて、ヘリオポリスが崩壊したとしても、オートで近くの中立コロニーにたどり着く事ができる。少なくとも生き残れる。
「クソッタレ、なんでこいつらを巻き込むんだ！」
カズマは知っていた。ヘリオポリスは戦場になっていると言う事を。
直感で感じ取っていた。戦闘の匂いがした。戦いの雰囲気が周囲

に漂っていた。中立のはずの、このコロニーに。
　これは一方的なものではない。敵と敵が闘っている。そんな、感覚。
　それをカズマは感じていた。
「カズマ！」
　君島があらわれる。その横には、寺田あやせもいた。
「君島」
「立てよ。行くぞ。こんなところでモタモタしてたら、シェルターに入れなくなっちまう」
　しかし、カズマはそれに答えない。かなみの傷ついた膝を見て、その表情に怒りの感情を顕にしていた。
「カズマ……？」
「かなみを頼む」
　立ち上がり、その手に抱えているかなみを君島に押し付けるように差し出す。君島は戸惑いながらもかなみをカズマの手から受け取る。
「おい、何をする気だ？」
「君島、喧嘩だ。あいつら喧嘩を売ってきやがった。だったらどうする？答えは一つだ」
　カズマは拳を握る。そこにあるのはただ、日常と平和を破壊した者に対する怒り。
「喧嘩を買う、あいつらを叩き潰す！」
「何言ってんだカズマ！そんなの無茶だ！相手はＭＳなんだぞ！」
「俺はいい。俺はいいんだよ。けどな、かなみが、お前が、あやせが、何をしたってんだ？何にもしてねえだろ。なのに、あいつらは人の場所に土足で踏み入りやがった。相手がザフトだろうがＭＳだろうが、許せねえもんは許せねえ！」
「カズくん……」
　かなみが今にも泣き出しそうな顔でカズマを見ていた。
　カズマが何をする気なのか、かなみはわかっていた。そういう男

なのだと、知っていた。
「心配すんな、かなみ。ちょっと用事ができちまっただけだからよ」
カズマは走り出した。ザフト軍のＭＳ、ジンに向かって。
「おい、待てよカズマ！」
君島の声に、カズマは振り返らなかった。

カズマは丸腰でジンの前に飛び出した。普段から着ているジャケットと、右手にはめているグローブ以外は、なにもない。ＭＳに対抗するすべなど、あるわけがない。
ジンの手にはサブマシンガンが握られていた。もし一発でもそれをくらえば、カズマは肉片と化すだろう。そもそも、人間がＭＳに敵うはずが無い。
「おい、クソッタレのザフト野郎！」
それなのにカズマは叫ぶ。中指を突きたて、ジンに搭乗しているパイロットを挑発している。
ジンのモノアイがそれを捉えた。恐らく、パイロットは困惑しているだろう。地球軍でもないただの一般人が、何故ＭＳの目の前に表れたのか。だが、それは数秒の間の迷いだ。ジンはカズマに向けてサブマシンガンの銃口を向ける。
《そこの民間人。下がらなければ撃つぞ！》
その警告はパイロットなりの情なのかもしれない。
そもそも、ザフト軍はヘリオポリスをただ破壊させたいわけではない。地球軍の極秘開発しているＭＳを奪取したいだけなのだ。新型ＭＳは高性能だ。地球軍が破壊されたジンを調べ、ザフトの進んだ技術を学び、それを応用した機体。それが、地球軍の新型ＭＳ。

もしそれが量産されてしまえば、パイロットの技量では圧倒的に勝っているザフト軍も、ＭＳの性能と物量にものを言われ、負けてしまうだろう。それを防ぎたいだけなのだ。なにも、民間人の大量虐殺をしたいわけではない。だがらこその、警告。

だが、カズマは退かない。

「ぐたぐた言ってんじゃねぇよ！撃ちたきゃ撃ってみやがれ！」

《……警告はしたぞ》

ジンのサブマシンガンが弾を吐き出す。七十六ミリの、巨大な弾丸を。

カズマはそれを走って避ける。弾が着弾したには大きなくぼみができる。ペリオポリスの地面を、削っていく。

カズマはそのまま、ジンの足元へと潜り込んだ。ジンにとって、そこは完全な死角だ。サブカメラはあるが、足元にはない。パイロットはカズマを見失う。

パイロットはモニターを見回し、カズマを探す。しかし、いくら探しても見つからない。

その時、コックピットのハッチが開いた。

「な……」

そこにはカズマがいた。この男は、ジンの足をよじ登り、腹部付近にあるコックピットまでたどり着いたのだ。コックピット周りには、ハッチを開けるためのレバーがある。それを引き抜いた。だが、普通の人間はそんな事を知りはしない。

「もらった！」

カズマは驚くパイロットをヘルメットの上から殴りつける。直接のダメージは無い。だが、パイロットはヘルメット越しに後頭部をシートに打ち付け、瞬、意識が飛んでいく。

その隙にカズマはザフト兵をコックピットから放り投げる。ザフト兵の身体が地面に叩きつけられた。

カズマはハッチを閉め、ＯＳを確認する。時折操縦桿を動かし、動作を確かめる。

「……なるほどな」
そう呟くと、カズマは操縦桿を前に押しやった。ジンが歩行をはじめる。
「基本的には、昔からあるＭＳと対して動作は変わってねえ。ＯＳがマシな分、複雑な動きができるってくらいか」
カズマの駆るジンはサブマシンガンを捨て、サーベルを引き抜く。
「オッケェ、こいつで暴れてやる。売られた喧嘩は買ってやる！」

## ヘリオポリス　5（前書き）

ちょい短めです

《おい、お前、何者だ！？》
ザフト兵の通信を無視し、カズマはジンを走らせる。ブレードを片手に、サブマシンガンを持つジンの集団に向かって、突っ込んでいく。
ジンが民間人に乗っ取られるというその事態に、ザフト兵は困惑していた。当然だ。ザフト兵は全てコーディネイターで構成されている。ナチュラルのそれとは比べ物にならない能力を持っている。それが、何の訓練も受けていないただの一般人にしてやられるなど、誰が考えるだろうか。
しかも、奪取されたジンはザフト兵にもできないような、軽やかな動きを見せている。カズマはジンを乗りこなしていた。ＯＳをざっと眺めて動作を確認しただけで、その操作法をマスターしていたのだ。
「テメェら、人様の庭同然の場所でこれだけの事をやらかして、知らぬ存ぜぬで済むとおもうんじゃねぇぞ！」
カズマは吼え、ブレードを振るう。一機のジンの胴体に、十分に加速したそれが直撃する。装甲がひしゃげ、豪快に吹っ飛んだ。
周囲のジンが、一斉にサブマシンガンを放った。装甲が欠けていく。少しずつ後退してしまう。
「しゃらくせえ！」
カズマはジンを跳躍させ、弾丸の雨を切り抜けた。集団の中の一機の上に着地する。頭部を破壊しながら、カズマは再びジンを跳躍させた。

それはコーディネイターのみで編成されているザフト兵の中でも、赤服と呼ばれるようなエリートですら容易にはできないような、そんな動きだった。ジンの性能を限界まで引き出して、それでもやっとできるかできないかの技巧。常識で考えれば、一般人がそんな事ができるわけがない。ジンを歩行させるのにだって、精一杯のはずだ。

カズマはブレードを集団に向かって投げるつける。回転をしながら飛んでいくそれは、三機のジンをまとめて破壊した。機体が爆発し残り一機となったジンも吹き飛ばす。

カズマは爆風で倒れたジンに向かい、走る。

起き上がろうとするその機体の頭部を踏みつけて破壊した。メインカメラを失っても、闘うことはできる。しかし、碌な動きはもうできない。

カズマはブレードを拾い、それで機体を突き刺した。数秒後、爆発が起きる。周囲に熱い突風が吹き荒れる。車や建物の窓ガラスが、数枚、割れた。

計五機のジンを破壊したカズマは、次の目標を探す。

視界に三機のジンが映る。サブマシンガンを構え、地面に向けて撃っていた。カズマの表情が怒りで塗りたくられる。

許せなかった。平和な毎日を破壊していった者達が。今なお、自分たちの暮らしていた場所を破壊していく者達が。

カズマははぐれ者だ。平穏な毎日を暮らせる事に、奇跡を感じるほどには。だから、こんな状況を突きつけられても特に、何も感じはしない。ある意味、この状況の方がカズマにとっては当たり前だったからだ。

だがそれは、カズマ一人だったら、の場合だ。

ここに住む人間は戦争が嫌で中立コロニーに避難したものばかりだ。君島もあやせもそうだ。かなみの場合はカズマについてきただけだから少し理由が違うが、しかし戦争に巻き込まれるようなことを望んでいるわけではなかった。

それなのに、ザフトは破壊を行う。平和な場所に、戦争を持ち込んでいる。
「許せるかよ。えぇ、おい！」
カズマはその場所に向け、ジンを向かわせる。

## ヘリオポリス　６（前書き）

調子に乗ってスクライドキャラ出しすぎた。
なので、これからのキャラは大体ＳＥＥＤキャラのままで出てくると思います。
つか、ミゲルっていいキャラですよね。登場シーン少ないけど。
今更ですが、これはスクライドとＳＥＥＤのキャラが大体どちらともわかっている、みたいなつもりで書いてます。別に、かたっぽだけでもわかればどうにかなると思いますが。
なので、そこまで深く特徴とか書かないし、容姿がわからなかったら、作品の公式ＨＰとか見て、想像してみてください。
どっちも同じキャラデザなので、混ぜやすいと言えば混ぜやすいかも。

あ、ちなみの小林はスクライドのキャラですが、多分公式ファンブックにしか載ってないと思います。本来は名前すら無かったキャラなので……

なんか三人称とはいえコロコロ視点が変わってますが、多分最初だけだと思うので、ご容赦ください。
つか、ヘリオポリス編なげえ。

《――小林は失敗だ。あの機体には、地球軍の仕官が乗っている》
高速でキーボードを叩きながら、劉鳳が言った。ＯＳを書き換えている。地球軍のそれでは、満足にＭＳを動かす事ができないからだ。
「そうか、あいつがな……お前は早く、その機体を隊長にお届けしろ。あの機体は、俺たちが捕獲する」
《すまない、ミゲル》
「もしもの為の、俺たちだろう？気にするな。それに、あいつの敵もとらなくちゃならない」
ミゲルと呼ばれた青年が、暗い笑顔を見せた。
ミゲルと劉鳳は同期の兵士だ。つまりそれはミゲルと小林が同期と言う事でもあり、その同僚が死に、悲しみがないわけがない。
兵士は突然に死ぬ。実力者だとしても。それが戦場と言う事を、劉鳳もミゲルも、理解していた。
だから無理にでも笑顔を見せる。任務を達成するのが第一であり、それが軍人と言うものだからだ。
《すまない》
劉鳳が奪取したＭＳ、イージスを起動させる。灰色の装甲が赤のものへと変わった。仰向けの状態から起き上がり、バーニアを吹かして、飛行する。
その側では、のろい動作で白のＭＳが立ち上がっていた。
「機体の性能がジンを上回っていたとしても、所詮はナチュラル。ＯＳや操縦技術が、機体に全く追いついていない。ジール。ザイン。

俺を援護しろ」
ミゲルがジンを駆る。ブレードを振りかざし、白のＭＳへ突進した。背後では二機のジンが白のＭＳへ向け、サブマシンガンを放つ。
白のＭＳはそれらを真正面から受けた。ミゲルの振るったブレードを、右腕で受ける。
避けれなかった。避けなかった、と言っても差し支えは無いが。
「――何！？まさか、フェイズシフトか！」
ミゲルが驚愕の声を上げる。ブレードも弾丸も、白のＭＳの装甲を全く傷つける事ができなかったからだ。
フェイズシフト装甲に実弾や実態剣は通用しない。電力と引き換えに、ダメージを無効にしてしまう。技術そのものは確立されていたが、兵器として転用したのは、前例がなかった。
「ならば！」
ジンの身体を丸ごと、体当たりさせた。白のＭＳが吹っ飛び、建物に突っ込む。
フェイズシフトは装甲自体のダメージは無効にするが、その衝撃までは無効にできないのだ。
「他愛もない。ナチュラルなんて、この程度だ」
その時だった。
《テメェら、覚悟しやがれ！》
罵声がミゲルのコックピット内に響いた。
《うわ、なんだ！？》
《民間人が、どうしてその機体に乗っている！》
ジールとザインの困惑した声が聞こえてくる。ミゲルは二機のほうへ視線を向けた。
するとそこには、真っ直ぐに向かってくる、一機のジンの姿があった。
モニターには、見知らぬ男が映っている。わざわざザフト全軍に向けて、通信を発しているようだ。
「迎え撃て！」

ミゲルは叫ぶ。迷わずに、二機へ指示を下した。白のＭＳが起き上がる様子を見せない事を確認すると、自らも機体を走らせる。
「何者だ、貴様！」
《答える義理も道理もねぇよ！》
モニター越しに、男が叫ぶ。
二機のジンがサブマシンガンを撃った。しかし、男は弾丸を機体に受けながら、それでも直進している。肩や足の、コックピット付近に弾丸がかすろうと、構わずに。二人のパイロットが動揺してまともに照準を合わせられていないのを、見透かしているように。
《頭はテメェか！》
男は二機を素通りすると、ミゲルへ向けてブレードを向けた。弧を描き、コックピットを直接狙ってくる。
ミゲルは舌打ちをしながら、それを回避する。そして、交錯際にブレードを叩き込んだ。ジンの上半身にブレードが抉りこむ。
直後、男が乗っていたジンが爆発した。

――やべぇ！
カズマはハッチを開け、機体から飛び出した。
一秒と待たず、背後でジンが爆発する。その爆風に吹っ飛ばされ、カズマは勢いよく、木々に突っ込んだ。もし、それがコンクリートの地面だったなら、カズマの身体はいくつかの肉片となっていただろう。
カズマは痛む身体に鞭打ちながら、木の上から飛び降りる。かすかなうめき声が漏れた。
「お前、こんなところで何をしている！」
カズマに対し、帽子を深々と被った者が、叫んだ。

――敵か！
カズマはその者に向かって飛び掛り、押し倒す。首を右手で握り締め、左腕で肩を抑えた。馬乗りの態勢になり、身動きを取れないようにする。
帽子がとれかかった。カズマの目に、綺麗な金髪の髪をした少女の顔が映る。
「女？」
「は、離せ！」
「何者だ、テメェ。ザフトか？」
「違う、私は――」
少女は視線を泳がせた。
「私はザフトではない。確かめなければならないことがあって、ここに着た」
「――地球軍か？お前」
「違う！私は、カガリ・ユラだ！オーブの、いや、ただの民間人だ！」
苦しそうな顔で少女は叫ぶ。カズマは首からその手を離した。両肩を押さえつけていた腕もどかし、立ち上がる。
「そうか。すまねぇ。悪かった」
少女が咳き込みながら立ち上がろうとしたその時、轟音と共に、ヘリオポリス内が振動した。
すぐ真横に、巨大な白の巨人が滑ってくる。
「やはり、これは地球軍の新型ＭＳ……」
カガリと名乗った少女が、小さな声で呟いた。その声は、今にも泣き出しそうだ。
「地球軍の新型ＭＳだと？なんでそんなもんが、こんな場所にあるんだよ」
カズマは少女に問う。だが、少女に耳にそれは聞こえない。
「こんな物をこんな場所で……お父様の、裏切り者ッ！」
白のＭＳのハッチが開いた。コックピットから、技師と思われる

男性が這い出し、そして悲鳴を上げながら逃げ出した。
三機のジンが無人の白のＭＳへ向けて歩み寄ってくる。
周囲には誰もいなかった。ＭＳの戦闘で建物がいくつも壊れていた。非難命令を告げるアナウンスが響いている。そしてそれをかき消すような、三機のＭＳの足音と駆動音。
カズマの視界に映るのは、白のＭＳ。そしてその表情は、怒りで染まっていた。
「お前、来い」
カズマは泣き崩れるカガリの手を掴み、走り出した。
「な、お前、離せ！」
「こんな場所でくたばりたいのかよ。お前は」
コックピットの中に、少女を放り込む。そしてカズマもその中に潜り込んだ。
ハッチを閉め、ＯＳを確認する。先程と同じように操縦桿を動かし機体の駆動を確かめる。
「何をするつもりだ？」
涙声でカガリがカズマに訊く。
「こいつで、あいつらをぶっ叩く。地球軍の新型なんだろ。こいつ」
「無茶だ。お前、見てなかったのか？さっきまでこの機体、手も足もでてなかったんだぞ。しかもお前、こいつ操縦したことあるのか！？」
「ねぇよ」
「だったら！」
「俺はな、無理だ、できねぇ、どうしようもない。そんな風に諦めるのが、死ぬほど嫌いなんだよ」
「何を言って」
「だったらどうする？やるしかねぇだろ。俺は諦める方向にいきたくねえ。一度決めた事は貫き通す。ああ、そうだ。今は目の前にいるあいつらを、ぶっ飛ばす。それ以外の道なんて、選んでたまるか」
ＯＳ画面に文字が浮かび上がる。

「Ｘ１０５－ストライク。いいぜ、気に入った」
白の巨人、ストライクが立ち上がった。
「お前、本気なのか？」
カガリはシートにしがみついていた。すぐ隣にいるジャンパーを羽織った男の行動が信じられず、先穂までの悲しみすら吹き飛ばし、ただ驚愕していた。
「当たり前だろうが！」
カズマは叫び、ストライクを前進させる。

## ヘリオポリス　7

ストライクは一歩一歩、大地を踏みしめるように歩く。ストライクに向け、二機のジンがサブマシンガンを放った。
「おい、撃って来たぞ！」
「心配すんな」
フェイズシフト装甲が弾丸を無効化する。ストライクは無数のそれの中、前進を続ける。
一機がストライクへ向かってきた。ミゲルの搭乗するジンだ。ブレードを手にし、弾丸の中を迫ってくる。
「さっきはよくもやってくれたな、ザフト軍の犬っころさんよぉ。落とし前はきっちりつけなきゃなあ！」
ストライクが太股に収納されていたアサルトナイフ、アーマーシュナイダーを取り出した。ミゲル機にそれを突き刺す。
だがそれよりも早く、ジンのブレードがストライクの装甲を捉えていた。ストライクの動きは鈍かった。それは決して、カズマがストライクの操作に慣れていないからではない。
ストライクのボディがヘリオポリスの地面を振動させる。建物を破壊しながら、その機体は地面に倒れていく。
「お前、全然ダメじゃないか！」
「うるせぇ！」
「あんな大層な事言っといて、結局は返り討ちか！」
「この野郎、喧嘩売ってんのか！？」
コックピット内に罵声が響きあう。
「クソッタレ、このＯＳなんなんだよ。ゴミクズじゃねぇか！」
「おい、大丈夫なのか？」
カガリが心配そうにカズマの顔を覗き込む。
正面にはブレードを手にしたジンが映っていた。残りの二機は、サブマシンガンを連射している。バッテリー切れを狙っているのだ。

フェイズシフトはその機能に電力を消費する。ダメージを軽減するたびに、電力が減っていく。
「言ったろ。俺は諦める方向にいきたくねぇって」
カズマはストライクを立ち上がらせた。
「ＯＳがクソで話にならないくらいダメなら、後は――」
「後は？」
「意地と気合だ！」
「ハァ！？馬鹿かお前！？」
「黙って見てろ！」
ストライクは不恰好に前進する。それは辛うじて、走ってるように見えた。ジンの滑らかさとは程遠い、角ばった動き。それでも、ストライクのＯＳでは限界ギリギリの動きだった。
「どんなにクソなＯＳだって、無理矢理に動作を繋げてやりゃあ――」
ミゲル機がブレードを振るった。その瞬間、ストライクは自らの右足を横へ開く。その勢いで、機体が傾く。網一重の所でブレードを回避した。
カズマはすぐさま操縦桿を引き上げる。
ストライクの背部からバーニアが噴出した。足の裏のバーニアでバランスを整えながら、サブマシンガンを放つジンに向かい、右足を広げたまま突進する。
ストライクの右太股が、ジンを捉えた。頭部が機体からちぎれる。それは宙を舞い、そして街中に落下していった。
「ひとつめ（ファースト）！」
ストライクは右足を若干曲げて、その足の裏からバーニアを噴出す。地面を掴んだ左足を軸に、ストライクは方向転換を行う。そして、二体のジンに向かって頭部のバルカンを発射する。
弾丸が二機のジンを襲った。ミゲル機はブレードと盾にしてなんとか致命傷を防いだが、もう一機のジンは胸部にいくつもの弾丸を受け、動力を破壊されてしまう。モノアイから光が失せ、機能を停

止させた。
「ふたつめ（セカンド）！」
「お、おま……」
叫ぶカズマの横で、カガリは今にも吐き出しそうな顔色をしていた。
「そしてテメェで！」
バルカンを撃ちながら、ミゲル機に向かう。ストライクの奇怪な動きに面を食らったミゲルは、その対応に一瞬、遅れる。
ストライクが豪快に体当たりをかます。ミゲル機を引きずりながら、バーニアを吹かして、直進していく。
ジンがストライクに向かってブレードを突き刺す。が、フェイズシフトがそれを阻んだ。物理的干渉ならば全てを無効化にできる。それが、弾丸だろうと実体剣だろうと。
「みっつめ（ラスト）だ！」
ジンのボディがヘリオポリスの壁にめり込んだ。間接はショートし、まともな動作ができなくなっていた。
「みたかよ、ザフトのクソ野郎共！」
カズマが中指を立て、豪快に吼える。
その横でカガリが、げんなりとした表情ではき捨てた。
「無茶苦茶だ……」

## ヘリオポリス　8（前書き）

キャラ増えてきた。

それから数分後。カズマとカガリは拳銃を突きつけられていた。側にはフェイズシフトを切り、灰色となったストライクが鎮座している。
カズマたちを囲むのは七人の地球軍。その内の一人、女性の仕官がカズマに問いかけた。
「あなたたち、どうしてアレに乗っていたの？」
声は厳しく、その手に握られた拳銃はカズマの頭に向けられている。
「どうしてだと？　それは、こっちのセリフよ。テメェら勝手にこんな場所であんな大層なもん造りやがって。ふざけんじゃねぇよ。あのザフト軍は、テメェらが呼んだも同じだろうが」
「おい、お前……」
反抗的な態度を取るカズマに対し、カガリが抑えろよ、と声を潜めて言う。だが、カズマは態度を変えることはない。
「何か答えろよ。黙ってちゃ何にもわかんねえだろ？」
だが誰も答えない。ただ、拳銃を突きつけているだけ。トリガーには指が掛かっている。
「質問しているのはこっちよ。あなたは、黙ってそれに答えればいい」
女仕官が冷たく言い放つ。その声を聞き、カズマは眉を寄せ、叫んだ。
「そういう高圧的な態度がよ、俺の怒りに油を注いじまうんだよ！」
カズマが走った。取り囲む地球軍に襲い掛かる。引き金を引かれ

る前に一人を殴りつけた。周囲の兵士は、突然の事に困惑した。銃口を向けられて殴りかかるようなバカがいるとは思わなかった。
「教えてやるよ！すいませんとか、ごめんなさいとか、もうやりませんとか、言ったらどうなんだよ！ああ！？」
カズマは兵士を殴りつけ、のしていく。弾丸を巧みにかわし、その拳を顔面に叩き込む。
「や、やめなさい！」
「だったら謝れってんだ！」
瞬く間に六人の兵士を地面に叩き付けたカズマは、女仕官に殴りかかる。士官の顔が恐怖に歪む。カズマの握り拳がその顔面に叩き込まれようとする。その時だった。
「ひっさしぶりだな、カズヤ――！」
カズマは突如現れた男に真横から飛び蹴りを喰らう。大きく吹き飛ばされたカズマの身体は、勢いよくストライクのボディに激突した。
「ぐあっ！」
うめき声を上げるカズマから視線を逸らし、突然あらわれたストレイト・クーガーは、女仕官に手を差し伸べた。
「すいません、バカがなにやら粗相をしでかしたようで」
「い、いえ。私は大丈夫ですが……大尉はあの人物と面識が？」
「ああ、カズヤですか？　古い知り合いですよ。文化を知らない闘うことだけがとりえの、ただのバカです」
「俺はカズマだッ……！」
カズマがよろけながらも立ち上がる。
「クーガー、なんでアンタが地球軍なんかにいやがる！」
「俺の勝手だろう？　俺の道をお前に指図される筋合いはない」
「こんな事引き起こすようなやつらの仲間なのか、って聞いてんだ」
「ああそうだ。だったらどうする？」
「許さねぇ！」
「やるか、カズヤ！」

「カズマだって言ってんだろ！」
カズマとクーガーがお互いに飛び掛った。その瞬間。
「止めろ！お前たち！」
カガリが叫ぶ。
クーガーはそれに気を取られ、足を止める。無防備になる。
そこに、カズマの拳が叩き込まれた。
「何ィ――！？」
クーガーは驚きのあまり、声を漏らした。あの声を聞いて殴ってくるのか、と。
「闘いの途中でよそ見すんじゃねえ」
「お前はいい加減にしろ！」
カガリがカズマの頭を叩く。渇いたいい音が、ヘリオポリスに響いた。
「何しやがる！」
「考えないにもほどがある。大体、さっきだって――」
「カズくーん！」
遠くから幼い声が聞こえてくる。由詫かなみだ。カズマに向かって走ってくる。それを追いかけ、君島とあやせもやってきた。
だが、途中でかなみの足が止まる。表情が曇る。視線の先にはカズマ、そしてその側のカガリ。
「カズくん……その女の人、誰？」
頬を膨らませ、かなみはそんな事を言う。
「ハァ？　何言ってるんだよ、かなみ」
「その人とカズくん、どんな関係なの？」
「あのなあ、なんで俺がこのクソ女とわざわざ関係なんてもんを持たなきゃなんねーんだよ」
「ク、クソ女！？　もう少し言い方ってものがあるだろ！」
カガリが再びカズマの頭を叩く。
「テメェ、いい加減にしやがれ！」
「だからそれは私のセリフだ！」

「あーん、仲よさそうだよぉ」
「ち、違うんだかなみ。これは……」
カズマがなんとか説明しようとするが、かなみはそっぽを向いてしまう。
カガリはカズマに文句を言い続け、カズマはかなみの機嫌を取り戻そうと必死だ。そして、かなみはカズマの言葉に聴く耳を持たない。先程まで兵士に囲まれていたとは思えない光景だ。
女仕官がため息をついた。
「同情しますよ。文化を知らない野蛮人は一筋縄ではどうにかなるものじゃありません」
女仕官がその声の主に目をやる。その横にはクーガーがいた。
「で、あなた、名前なんて仰いましたっけ？」
「……マリュー・ラミアス大尉です。ストレイト大尉殿」
「そうですか。ではよろしくお願いします。マリー大尉」
「マリューですが」
「ああ、すみません。名前覚えるの苦手で」
その間にも、カズマは必死に語り続け、カガリはわめき散らしている。しかも、君島やあやせもやってきた。さらににぎやかになる。事情を聞きだせるような状況ではなくなっていた。
「ああ、いやですね。文化を知らない人間と言うものは」
クーガーのその言葉を聞いて、マリューはさらにため息をついた。

「しかし、彼はどうやってストライクで戦闘を行ったんでしょうか……」
ストライク及び他四機のＭＳのＯＳは、とてもではないが実践投入できるような代物ではなかった。機体を完成させ、地球に輸送し、地球軍本部で起動実験を繰り返して完成させる予定だったからだ。一応のＯＳは配備されていたため、操作する事は可能だ。だが、戦闘となると厳しいものがある。
「普通にでしょうよ。ＯＳを見て、操作法を確認して。それ以外に方法があります？」
「いや、しかし、ストライクのＯＳはまだ未完成で」
「例え未完成だろうがなんだろうが、あいつならそれくらいできますよ。馬鹿で文化を知らない野蛮人ですが、闘う事に関してだけは大したヤツです」
クーガーは大きく湾した、ピンク色のサングラスを上げる。
「とにかく、ここから脱出しましょう。ＡＡとやらは無事なんですか？」
「ええ、まあ。襲撃は受けたみたいですが、本来の目的は五機のＧだったようです。ナタル中尉からの報告によると、館長含め数十名が亡くなっていますが、艦事態は無事だと」
「それはよかった。後は彼らを何処か手近の退避シェルターに送り届けて」
「待ってください」
マリューがクーガーの言葉を遮った。
「まさか、軍事機密を目撃した民間人をそのまま解放するつもりですか？」
困惑するマリューをその場に放置し、クーガーはカズマ達の方へと歩く。

なんとかかなみの機嫌を直そうと尽力していたカズマは、クーガーを見るといきなり表情を変え、その胸倉を掴んだ。
「さっきはよくもやってくれたな、クーガー」
「おい、止めろよカズマ！」
君島が叫ぶ。当然だ。軍人の胸倉を掴むなど、常識では考えられない。
「まあまあ、落ち着けって」
「これが落ち着いていられるか！アンタらはこの状況をどうやって説明すんだ！」
「それはすまないと思っている。代わりといっちゃあなんだが、お前らは釈放だ。開放だ。どこへでも好きな所へ行け」
「……は？」
「もうアレは軍事機密じゃなくなったしな。たかが数人に目撃された所で、どうってことない」
敵対しているザフトに情報が漏洩している時点で、あのＭＳはもう機密ではなくなっているのだ。
「だからカズヤ。お前はさっさと退避シェルターに」
「嫌だね」
カズマはそう吐き捨てた。
「ハァ？　カズヤ、お前俺の話聞いてたか？」
「そうだぜ、カズマ。何考えてるんだよ」
「カズくん……」
「何考えてるんだ、お前は」
「カズマ、あなた」
「俺はまだ、あいつらに借りを返してないんだよ」
カズマは拳を握る。怒りを籠めて。
「ああ、そうだ。人の家に勝手に土足で入りまわったあいつらに、俺たちに喧嘩を売ってきたあいつらに、俺はまだ借りを返してねぇ。その横っ面をぶん殴ってやらなくちゃ、俺は気がすまねぇんだよ」
「あのなあ、カズヤ」

「そのためにはあのＭＳが必要だ。だからあいつは俺のモンだ。俺のために俺が使う。元々パクられそうになってたモンなんだから、構わねぇだろ」
「そういう問題じゃ……ん……？」
「そら、敵さんがお出でなさったぜ」
ヘリオポリス内部に、複数のジンが進入してきた。何のためかは、考えるまでもない。
ジンはストライクを確認すると、一直線に向かってくる。その手にはサブマシンガンがあった。
「おい、君島！」
走り出すと同時にカズマが叫ぶ。
「倒れてるそいつら連れて、こいつについてけ！」
「待てよカズマ！お前、また……」
「喧嘩はまだ終わっちゃいねぇんだよ！」
「カズくん！」
かなみの声を無視し、カズマはストライクにコックピットに乗り込んだ。
外からはマリューの罵声が聞こえてくる。それを意に介さず、ストライクを起動させる。灰色のボディが白へと変わっていく。フェイズシフトが作動した為だ。
「さぁて、三下がわんさかわんさか……楽しいじゃねぇかよ、ええ、おい！」

ザフト軍の戦艦の中で、二人の男が向かい合っていた。一方は椅子に腰掛け、もう一方はその前に姿勢正しく立っている。
ザフト軍とはプラントと言う、コーディネーターが暮らしているコロニー群の名称だ。国のようなものでもある。

コーディネーターは遺伝子調整された者の事を指す。受精卵の段階で才能をより高めるようにコーディネートされた人間。だからコーディネーター、というのが一般の考え方だ。逆に、遺伝子調整をされていない人間をナチュラルと呼ぶ。

コーディネーターとナチュラルは対立していた。それは、必然だったのかもしれない。　ナチュラルが年単位で習得する事を、コーディネイターは僅か一ヶ月足らずで習得してしまう。あるいは、もっと早く。遺伝子操作された優れた者。そうでない者は、生まれた瞬間から並みの努力では到底埋めることのできない差を付けられてしまっている。

だから戦争が起こったのだ。コーディネイターを認めたくないナチュラルと、そう産まれてきてしまったコーディネイター。両者の間の溝は、永遠に埋まる事はないかもしれない。

「そうか、彼は失敗したか……」

仮面をつけた男は、モニター越しにヘリオポリスの内部を覗いていた。ストライクが無茶苦茶な動きでジンを破壊していく様が映っている。

「はい。地球軍の仕官に射殺されました。私のミスです」

緑色の髪をした男が仮面の男に対して口を開く。

緑色の髪の男が着ているのは赤いパイロットスーツ。

対し、仮面の男が来ている軍服は灰色である。彼はザフト軍の部隊、クルーゼ隊の隊長であり、指揮官だ。アカデミー出身でない彼は「赤」でこそないが、その実力は相当のものであり、だからこそ「赤」を差し置き、部隊の指揮をしている。

「いや。君のせいではない。しかし問題はこのＭＳだ。たった一機だとしても、あの機体は十分な力を持っている。量産されてしまえば、プラントの大きな脅威となるだろう。ならば、劉鳳。君はどうする？」

仮面の男、ラウ・ル・クルーゼは「赤」を身に付けた自らの部下に問う。

「私が出ます。イージスの使用許可を頂いてもよろしいですか？」
劉鳳の回答を聞き、ラウは仮面越しに笑みを見せた。
「任せる。私はアークエンジェルとやらの方を叩く」
ラウの言葉に、劉鳳は頷く。

## ヘリオポリス　１０

マリュー達は狭い通路を走っていた。ヘリオポリスの地下、その奥深く。後ろには君島やカガリ、かなみやあやせもいる。
君島は激しく息を切らしていた。その肩には地球軍の仕官が背負われてるた。辛うじて意識を取り戻していた三人は共に走っているが、残りの三人は君島とクーガーが運んでいた。君島が一人。クーガーが二人。君島は呼吸も何もかも限界に近いが、クーガーは軽快な走りを見せている。
マリューは入り組んだ道を先導し、ある場所に向かっていた。
それは、地球軍が極秘裏に開発していた、もう一つのもの。
暫くすると、広い場所に出た。そこには数多くの残骸が漂っていた。裂けた鉄板やガラスの破片など。しかし、そんなものはどうでもよくなってしまうような、巨大なものがそこにあった。
「すげぇ、なんだこれ……」
君島は小さな声で、息を切らしながらも呟いていた。そうするだけのものだった。
全長４２０メートルの真っ白な巨大な戦艦。ＧＡＴシリーズ、つまりストライクや奪取されたＭＳの運用艦として開発されていた、強襲機動特装艦、アークエンジェル。
「ストレイト大尉、非常事態とはいえ、さすがにこれに民間人を乗せるのは」
マリューはためらいを含ませ、クーガーに尋ねる。
「しかし今から彼らをシェルターに連れてゆく時間がありますか？
おそらくザフト軍はここにも攻撃を仕掛けてきます。カズヤもいつまで持つかわかりません。見殺しにするのも気分が悪いでしょう

？　マリーさん」
「……マリューです」
「ああ、すみません」
　マリューは深いため息をついた。彼女自身もそれはわかっていはいた。だが人としては正しい事なのかもしれないが、軍人としては必ずしも正解とは言える回答ではなかった。それを全く躊躇いなく口にするクーガー。半ば、諦めのようなものをマリューは感じていた。
「俺はゼロに向かいます。あとは頼みます。マリーさん」
　そう言って担いでいた兵士を意識のはっきりとし始めた男たちにたくし、クーガーは走っていった。
　君島達を引き連れ、マリューはアークエンジェル内部に入る。通路を歩きながら、君島達に告げる。
「これは特例です。時が来れば、あなた方にはこの艦から降りてもらいます」
　それに対し、君島達は何も答えなかった。艦内は答えられるような光景ではなかったのだ。
　通路には人の死体が浮いていた。傷だらけで、血を漂わせた死体が。
　かなみはそれを見て目を伏せ、君島は顔を歪ませる。あやせは視線を意識的に逸らし、カガリは歯軋りをしていた。
「戦争なんですか、これ」
　あやせがマリューに尋ねた。信じられなかったのだ。今、自分たちの巻き込まれている状況が。ほんの少し前まで、大学の講義を聞いていた。
　しかし、今目の前にあるのは死体。戦いの傷跡。人と人の戦う、戦争の証。
「今まで外の世界は戦争を続けていた。コーディネイターとナチュラルの戦争をね。Nジャマーキャンセラーが世界中にばら撒かれ、エネルギーは枯渇した。あらゆる場所で戦闘行為は行われ、数え切

れないほどの兵士が亡くなった。今では、地球の一部はザフトに支配されている。平和だったこの場所が、異常だったのよ」

ストライクの持つアサルトナイフが、ジンのメインカメラを捉えた。それはそのまま頭部を突きぬける。ジンのコックピットのモニターから光が消えた。動きの止まったその瞬間、ストライクはジンに体当たりをかます。

ストライクの周囲には計十機のジンが転がっていた。いずれもメインカメラを破壊されていたり、足回りを壊されている。

そして最後の一機も、その膝間接部分にアサルトナイフを突き刺された。周囲に稼動しているＭＳはもうない。

「ハァ……ハァ……ハァ……」

カズマは荒い呼吸を整え、頬の汗を拭った。

「ざまあみやがれってんだ、テメェらよぉ」

ヘリオポリスの街並みは戦闘によって傷つけられ、ビルはいくつも崩壊し、道路は弾丸によっていくつもの穴をあけられていた。

カズマはその光景を見て、拳を握り締める。それを目の前に叩きつけ、俯き、そして言葉を口にする。

「チクショウ、クソッタレ、バカヤロウ……」

それから暫くして、突然、コックピット内にアラームが鳴り響いた。

カズマは反射的に顔を上げる。モニターには一機のＭＳが映っていた。赤い色をしたＭＳ。先程ザフトに奪取されたばかりのＭＳの内の一体。イージス。

「まだ、いやがったのかよ」

カズマは操縦桿を握る。そして、イージスに向けてストライクを駆った。

## ヘリオポリス　１１

「状況は！？」
マリューはキーボードを叩きながら叫んだ。ブリッジは振動している。
「出艦準備は八割がた完了してますが、まだ時間が！」
「ｘナンバー二機、ブリッツ、バスター、がヘリオポリス外壁に攻撃を仕掛けています！」
「イージスがヘリオポリス内に進入してきました！現在、ストライクと交戦中です！」
整備兵からの通信がブリッジに響いた。
マリューの横で同じく艦のデータを確認していた女性、ナタル中尉が口を開く。
「とにかくエンジンは起動できればいい！攻撃を受けているんだ。頭を使え！」
厳しい声が整備兵に投げかけられる。
再びブリッジが大きく揺れた。それでもマリュー達はキーボードを打ち込み、モニターを確認する。
マリュー達は元々、この艦に乗る為の士官ではなかった。しかし、正規クルーはみな、ザフトの襲撃によって亡くなってしまっていた。技師はまだこの艦の構造に精通しているが、マリューやナタルはマニュアルすら把握していない。
それでもやらねばならなかった。このままでは攻撃を受け続け、アークエンジェルは破壊されるのを待つだけだ。それはあ、どうしても避けなければならなかった。たった一機、奪還を免れた最後の

Xナンバーを地球軍本部の元へ送り届ける為にも。
「アークエンジェル、発進させろ！」
ナタルが言うと同時に、真っ白な戦艦のエンジンが起動した。轟音とともに、それが浮く。
「ハッチ、オープンさせて」
マリューの指示に従い、士官の一人が格納庫の隔壁を一つ空ける。真っ直ぐに長い道が開けた。アークエンジェルが余裕を持って通れるほどの、巨大な道が。その先は広大な宇宙へ繋がっている。
「外へ出るのと同時に、xナンバーへ対空ミサイルを撃ち込んでやれ！」
「し、しかし、xナンバーは……」
「今はもうザフトのモノだ！アレはもう敵だ！」
それに、とナタルが言葉を続ける。
「Xナンバーにはフェイズシフトがあるんだ。機体ではなく、中身を潰すと考えろ！」

バスターがその身の丈以上の長さのライフルから、ビームを打ち出した。ヘリオポリスの外壁をそれは削り取る。直撃しないように、ギリギリに掠める場所を狙っているのだ。
「ヒャハハ！俺の太くて硬いビックナグナムは暴れっぱなしだぜェ！」
笑い叫ぶのは立浪ジョージ。照準を別の場所へ向け、バスターが再度ビームを放つ。
《立浪、下品》
シェリス・アジャーニは小声で呟く。数秒後、ブリッツが右腕の巨大なそれからビームを発射した。バスターと同じく、狙いはコロニーの外壁。その目的はただ一つ。

「来た来た、おいでなすったぜ！でっかいネズミがよぉ！」
ヘリオポリスから、真っ白な艦がその身を出現させた。巨大な二つの足を持っているかのような、その姿。
立浪はそれに照準を向ける。長距離ビームライフルを打ち込むために。
だが立浪が照準をあわせるよりも早く、その艦からミサイルが発射された。
バスター、及びブリッツは回避行動に移る。ミサイルをビームライフルで打ち落としつつ、機体を後退させる。
なんとかミサイルを回避した二機。しかし、再びアークエンジェルへ目を向けると、第二波がやってきていた。
《手加減無しね！》
シェリスの声が立浪の耳に届く。
「だったらよぉ、こっちもやってやろうじゃねぇの？」
立浪がコックピット内にあるスイッチをいくつか押した。途端、バスターの持つ重火器、全ての砲門が開放される。
「俺のマグナムは一本だけじゃねぇんだよぉ！」
《それじゃあ、アタシも》
右手の巨大な武装、トリケロスからガスが噴射される。そして、ブリッツが消えた。不可視となったのだ。
隠蔽機構、ミラージュコロイド。それを使用すれば、肉眼やレーダーで捉える事ができなくなる。もちろん、ミサイルの誘導システムにもそれは適応される。
バスターは自らに襲い掛かるミサイルを打ち落とし、ブリッツはミラージュコロイドを利用してそれを回避した。
《お待たせしました！》
デュエルが後方のザフト艦からやってきた。その右腕にはロケットランチャーを装備している。
《遅いわよぉ、橘》
「こっちはもう、おっぱじめてるぜ？」

《ええ、わかってますよ。だからこれを……》
デュエルが二機を追い越し、アークエンジェルに接近する。対空ミサイルを頭部のバルカンで打ち落としながら、ロケットランチャーを構える。
《僕のタマを喰らいなさい！》
デュエルの持つそれが数発の弾丸を打ち出した。アークエンジェルからそれを迎撃する為にミサイルが打ち出されるが、当たらない。弾丸がアークエンジェルに命中しようと言うその時。
それらが全て爆破された。
《僕のタマが潰された！？》
デュエルに向かって四方八方から砲撃が襲う。橘はそれを回避するが、しかし一部を喰らった。フェイズシフトによって機体の表面には大した傷がつかない。だがコックピットが強く揺れた。
バスターのコックピットのモニターには、オレンジ色の戦闘機、メビウス・ゼロが映っていた。

メビウス・ゼロがバスターのビームを軽々とよける。姿の見えないブリッツのビーム攻撃を目視した瞬間に機体を回転させて避けて、デュエルのボディにガンバレルの一撃を喰らわせる。
「おいおいおいおい、人から勝手に奪った機体で断りなく勝手にドンパチやらかしやがって！」
クーガーは三機のＭＳを手玉に取っていた。敵がコーディネイターだろうと、ＯＳが高度なものだろうと、しかしそれは慣れていない機体。動きが鈍い。照準をあわせるのにも時間が掛かる。それではクーガーの駆るメビウス・ゼロを捉える事はできない。
銃口を向けるバスターに、すれ違い座間、背後からガンバレルを撃ちこんだ。振り向こうとしていたバスターはそれに対応できず、

もろに喰らう。
「機体の性能が戦力の差となるのか戦力の差が戦況の差となるのかいやいやそんなはずはない機体が劣っていようと戦力が劣っていようと最速で戦場を駆け抜けることができればありとあらゆる敵に対して圧倒的優位に立つ事ができる！」
デュエルのロケットランチャーを速さで振り切った。姿を隠したブリッツの居場所をビームの出どこから特定し、そこにガンバレルを発射する。
目視する事の敵わないブリッツを、ガンバレルが囲んでいた。一斉にそれらが弾を吐き出す。それらはブリッツに命中し、ミラージュコロイドを解除させた。
「この世の強さとはすなわち速さなのだ速さの前ではどんな力もどんな鉄壁も無力と化し全ては俺の速さの前に跪く！」
デュエルに向け、リニアカノンを打ち出した。デュエルはなんとかそれを回避した。その場所に向けて、クーガーはガンバレルを向けた。
直後、警告音。
「ガンバレルが切断された！？」
メビウス・ゼロのガンバレルは有線式だ。有線がなくともある程度の遠隔操作は可能だが、戦闘に使うとなると有線でダイレクトにコントロールしなければ、意味がない。クーガーはそれを切断されぬように、縦横無尽に動き回っていた。三機のXナンバーに有線を切断するという、その隙を与えないようにしていた。
しかし、それはされてしまった。
「ジグーか！」
クーガーは灰色のMSをその目に捉える。ザフトの指揮官用MS、ジグー。そのパイロットは仮面の男。ラウ・ル・クルーゼ。
「さあ、掛かって来い。例え貴様でも俺の速さは止められない……って、おい！」
戦闘を行おうと一瞬身構えたクーガーだったが、ラウはそれを気

にすることなく、機体をアークエンジェルへ向けた。
ＭＳと戦艦。接近戦となればどちらが有利となるか、言うまでもない。ジグーにはブレードが装備されている。それを艦上で振り回されたら、ひとたまりもない。
対空ミサイル、そしてビーム方がアークエンジェルから撃たれる。だがジグーはそれを予測し、マシンガンで打ち落とし、巧みにアークエンジェルとの差を詰めていく。
「俺を追い越せると思うな！」
ラウを追うクーガー。その背後ではバスターの銃口がメビウス・ゼロに向けられていた。メビウス・ゼロは機体を回転させた。直後、光の筋がギリギリの場所を掠める。
「ギリギリ……ん、まずい！」
そしてその一筋の光は、ヘリオポリスの外壁を貫いた。

## ヘリオポリス　１１（後書き）

そろそろヘリオポリス編も終わりそう。
このままのペースだと、１００とか２００とか余裕でいきそうだから怖い。

## ヘリオポリス　１２

ヘリオポリスの中で二機は闘っていた。
ストライクの右肘から先は切り落とされ、カズマの額からは血が流れている。
対するイージスはほぼ無傷で、劉鳳は冷徹な眼差しでストライクを見据えている。
背筋が凍りつくような感覚をカズマは感じていた。状況は圧倒的に不利。このまま闘えば、負ける事は目に見ている。しかし、逃げない。
イージスがストライクのコックピットに向けて、ビームサーベルを振るった。
カズマの視界には黄色く輝く光の剣が映る。それが弧を描きながら、近づいてくる。
ストライクが紙一重の所でそれをかわす。しかし次の瞬間、もう一方のイージスのビームサーベルがストライクの左手首を切り取っていた。
「クソッタレが……っ！」
コックピット内に鳴り響く警告音。バルカンの弾はすでに切れ、コンバットナイフはなくなった。武装はなし。バッテリーも限界に近づいている。
イージスのパイロット、劉鳳は無言でそれを見ていた。観察している。捕獲対象であるＭＳの限界を見極めようとしている。
ストライクは体当たりを試みる。武装がなくなり、満足なＯＳのないストライクには、それが精一杯だった。
カズマの額から流れる血が、シートに滴り落ちる。右目に入り、視界が半分消えかかる。

「うるあぁぁぁあ！！」
イージスがバーニアを吹かした。上昇。ストライクの精一杯の足掻きは空振りに終わる。バランスを崩し、ビルへと倒れこむ。
コックピットが激しく振動する。カズマの身体のいたるところがシートやモニターに打ち付けられる。額の傷はさらに広がった。流れる血で右目が全く見えない。
ストライクのボディが灰色になる。フェイズシフトが切れたのだ。そしてそれは、バッテリーの限界を意味する。稼動する事はもはや敵わない。
イージスが地面に着地した。動かなくなったストライクをその手が掴む。機体が動くのをカズマは感じる。
カズマが操縦桿を押しやった。イージスに対し、ストライクが体当たりを行う。
不意をつかれたイージスは後退する。しかし、劉鳳の表情は全く変わらない。それが僅かな最後の電力をつかったあ悪あがきだと言う事を、劉鳳は知っていたからだ。
ストライクが再び倒れる。
「卑怯だって、怒るかい……？」
カズマが呟く。その声はイージスに、そのパイロットである劉鳳に届く事はない。
もうストライクに足掻くだけの力はなかった。文字通りの限界。武器はない。右肘と左手が切断されている。満身創痍。動く事もままならない。
その時、一筋の光がヘリオポリスを貫いた。
バスターの放ったビームだった。それがヘリオポリスに大きな二つの穴を開けたのだ。
内部の空気が宇宙へと漏れ出す。車や木々、ＭＳやビルの残骸がその穴へと吸い込まれる。
次第に穴は大きくなっていく。周囲の何もかもを飲み込み、破壊し、そしてヘリオポリス、その大きな一つのコロニーそのものを崩

壊させていく。
「く……っ」
劉鳳が若干顔を歪めた。イージスとストライク、二機も例外なく宇宙へ放り出される。
いくつもの瓦礫が二機の間を阻んだ。ストライクとイージスは別々の場所に吸い込まれた。劉鳳は完全にストライクを見失う。
《劉鳳、劉鳳、聞こえる！？聞こえたら応答して！》
シェリスの声がイージスのコックピット内に響いた。
「ああ、俺は無事だ。だが……」
モニターには、原型を完全に失った瓦礫の山が映っていた。

――負けた。
コックピットの中に光はない。真っ暗だ。カズマは自分が何処かに流されていくのを感じていた。
ストライクは広大な宇宙を漂っている。周囲には何百、何千、何万もの瓦礫。
辛うじて残った最後の電力で生命維持装置が起動していた。それがカズマの窒息死を防いでいる。しかし、それが切れるのも時間の問題だ。
――俺が、負けた。
ザフト軍は撤退を始めていた。ＭＳは艦に収用される。この空域から離脱するのだろう。目的はほぼ果たしたのだ。それに、この状況で何かができるわけでもない。
ストライクは宇宙を彷徨う。敗北感に打ちのめされるカズマを乗せて。

## ヘリオポリス　１２（後書き）

ヘリオポリス編終了。
次はアルテミス編です。

# アルテミス　1

ザフト艦、ヴェサリウス。その中のミーティングルームに、四人の赤いパイロットスーツを着た若者がいた。
ソファーに堂々と身体を預けているのは立浪ジョージ。シェリス・アジャーニは缶ジュースを片手に持ち、イスに腰掛けている。橘あすかは窓の外を眺め、そして劉鳳は壁にもたれかかり、まぶたを閉じていた。
「まさか、こんなことになるなんて……」
橘は遠くの無数に浮かぶ瓦礫を見つめ、呟いた。それはかつてヘリオポリスだったものだ。
「何、感傷に浸ってやがんだ」
立浪は天井を仰ぎながら言葉を口にした。その表情は笑っているようにも見える。
「何って、中立コロニーを一つ、破壊したんですよ!?」
「何が中立だ。橘、お前もあいつに乗ってわかっただろ？　ありゃあ、とんでもない兵器だ。はるかにジンを越えるスペックじゃねぇか。あんなの造ってたコロニーが、中立なわけねぇだろ？　ぶっ壊されて当然だ。そうだろ？」
「ですが」
「それによぉ、あそこにいたやつらは小林を殺したんだよ。あれは完全な地球軍のもんだよ。だから気に病む義理なんて、どこにもねぇ」
「そうよ橘。確かにコロニー壊しちゃったのはやりすぎだけど、私たちは任務をこなしただけ。仲間が死なない為にね」

橘もそれはわかっていた。
さきにやらねば、自分たちがやられる。
だからクルーゼ隊はプラント評議会の決定を待たずして奇襲をかけたのだ。橘もそれは理解している。だが、目の前の光景はそう簡単に割り切れるものではない。
橘はナチュラルを毛嫌いしている。それが死ぬ分には何も思わない。しかし、中立であるヘリオポリスにはコーディネイターもいたのだ。
「『血のバレンタイン』に比べればはるかにマシよ」
シェリスは吐き捨てるように呟く。
『血のバレンタイン』。今からほど一年前に地球軍によって行われた、農業プラント、ユニウスセブンに対する核ミサイル攻撃。二十四万三千七百二十名のコーディネイターがそれによって亡くなっていた。
プラントとは、地球での迫害を受けたコーディネイター達の集まりだ。地球に居場所のないコーディネイター達は、その居場所を宇宙に求めた。
コーディネイターはいくつものコロニーを建造した。そこで工業製品やエネルギーを生み出し、地球と貿易をする事で、コーディネイターは完全に宇宙で暮らそうとしていた。
しかし、ナチュラルたちはそれをよしとしなかった。
一部の力を持った国がプラントからの利益を独占しようとしたのだ。
それらの国はプラントの武装、および食糧生産を禁じた。自国との貿易を強制する為に。
当然のように、プラントと地球の関係は悪化した。互いに輸出入を断ち切るほどに。
そんな中、地球軍はプラントにとって貴重な食糧生産地であるユニウス市のコロニーのうちの一つ、ユニウス・セブンに核ミサイルを撃ち込んだのだ。

「あんな事をしておいて、今度は中立コロニーを隠れ蓑にして兵器開発。ナチュラルってのは学習しねぇよな。なあ劉鳳。てめぇもそう思うだろ？」
「――ああ」
目を閉じたまま、劉鳳は答える。
表情には出さない。『血のバレンタイン』で母親を殺されているということは。

ストライクのハッチがレーザーカッターで無理矢理こじ開けられた。
「生きてるか！？」
整備兵の一人、マードックが大声で叫ぶ。
「死んでるんじゃないのか？　生命維持装置は切れてるんだ。パイロットスーツも着てない」
「生きてるにしろ死んでるにしろ、とにかくこいつを出さなきゃならなん。おい、お前ら。手伝え」
数人の男がカズマの身体を抱る。コックピットの中のいたるところに血がこびりついていた。
仰向けに倒れているストライクから、カズマは引きずり出される。
「全く、こんな若造がどうやって……」
マードックは五機のXナンバー、その全ての製造に関わっていた。機械を動かすのは本職ではないが、自らのくみ上げるそれがどれほどのスペックを持っているのか、どれほど扱いが難しいものなのか、それくらいはわかる。
「……」
マードックの耳に、かすかな声が聞こえてきた。

「なんだ、生きてるじゃないか。おい、救護班を呼べ！」
数分後、カズマは数人の男女にタンカに括り付けられ運ばれた。
「すごいですね、あのガキ。生命維持装置無しで、生きてたなんて」
若い整備兵がマードックに語りかけた。
「あいつ、なんて言ってた？」
「は？」
「あいつ何か言ってたよな。俺はよく聞こえなかったんだよ。お前、あいつの側にいたろ。なんて言ってたのか、教えろ」
質問の意味を理解した整備兵は、失礼しました、と言ってからそれを告げる。
「確か、刻んでやる、とか言ってましたよ」

「ストライクは既に運び込まれていたGの予備パーツを使って修復します。ストライカーパックも一通りありますし、運用には問題ないでしょう」
ナタルは報告書を読みながらマリュー、そしてクーガーに告げる。
三人は会議中だった。今アークエンジェルの中である程度の地位があり、状況判断が下せるのはこの三人だけだ。今アークエンジェルに乗り込んでいるのは若い兵ばかりだ。この三人も、十分に若い。
「ストライクに乗っていた少年も、どうやら一命を取り留めたようです。問題は今後のストライクの扱いについてですが」
「俺は乗りませんよ」
クーガーがナタルの声を遮った。
「し、しかし、ストレイト大尉」
ナタルは困惑しながら続ける。
「あなたが乗らないという事は、あの機体を遊ばせておくことにな

るんですよ　？」
「あれは有用な兵器です。あなたほどの腕前を持つパイロットが乗れば」
マリューもナタルと同意権のようで、クーガーを説得するように告げる。
しかし、クーガーは二人の言葉に頷かない。
「絶対にノゥです」
クーガーはサングラスを人差し指で直し、そして一気に早口でまくしたてる。
「この世の理はすなわち速さだと思いませんか？物事を早く成し遂げればその分時間が有効につかえます！遅いことなら誰でも出来る！２０年かければ馬鹿でも傑作小説が書ける！有能なのは月刊漫画家より週刊漫画家！　週刊よりも日刊です！つまり速さこそ有能なのだ！これが文化の基本法則！そして俺の持論ですぅ～！　」
クーガーの声が会議室に高らかと響いた。
「つ、つまり？」
「俺は、ゼロより遅い機体に乗るつもりはありません」
マリューの問いに対し、さらっとクーガーは答えた。
二人の女性仕官はその勢いに有無を言わさず納得させられてしまう。
「それに、俺が一人で闘うよりもカズヤと二人で闘ったほうがいいでしょう？」
「……彼は一般人です。訓練も受けていない。そんな少年を戦力として数えるなんて」
ナタルはクーガーに反論する。両親がともに軍人である彼女には、そんなことは認められないのだ。そもそも、民間の人間がＭＳを扱うということが既に彼女にとっては間違ってる事のように思えた。
「あいつは既に、十数機のジンを撃退しているんですよ。そんじょそこらの兵士が三十人いるよりも、あいつがいたほうが戦力になります」

それに関してはマリューも認めざるを獲なかった。
未完成のＯＳでジンを三機したのをその目で見たのだ。その後、十機のジンを破壊したのも知らされている。戦力として有効なのは確かだ。
「そんなことより、問題はこの艦の進路です。当てもなく彷徨うわけにもいなかいでしょうし」
現在、アークエンジェルはヘリオポリスから僅かに離れた空域を彷徨っていた。ザフト艦との間には無数の瓦礫があり、互いにレーダーで認識することはできない。今の所は奇襲を受ける心配はない。しかし、だからと言ってそのままじっとしているわけにもいかない。
「ならば、アルテミスへの寄港、というのはいかがでしょうか」

## アルテミス　2

「光波モノフェイズシールドに守られた、ユーラシア連邦の鉄壁の宇宙要塞ですか。確かに逃げ込む場所としては最適です。しかし、同盟を組んでいるとはいえ、他国にこの艦とストライクを見せる事になっちゃいますよ、バジルールさん」

「お言葉ですがストレイト大尉。この状況ではこの選択がベストだと思われます。我々は皆、若い兵士。僅かな戦力はありますが、長期戦になれば厳しい。ＭＳとＭＡが一機づつでは、補給無しでアラスカ本部にたどり着く事はできないでしょう。ここはアルテミスに援護を要請した方がよろしいかと。友軍からの要請ならば、ユーラシアも断るわけにはいかないでしょうし」

「まあ、それも一理あるといえばあるか……どうします、マリーさん」

「え、私ですか？」

いきなり話を振られたマリューは困惑した。

「この艦で一番階級が高いのは貴方です」

ナタルは凛とした声を発した。彼女の家からは軍人が多く出ている。彼女も幼い頃からそうなるべく教育されていた。その声にマリューは気おされる。

「ストレイト大尉も同階級なのでは？　それに経験も私よりも大尉の方が多いはずです」

マリュー・ラミアスは大尉。ストレイト・クーガーも大尉。ナタル・バジルールは中尉。これ以上の階級を持つものはアークエンジェル内に存在しない。

クーガーの地球軍の入隊はマリューよりも遅いが、実戦経験の量はクーガーの方が圧倒的に多い。そもそも、マリューは技師として軍にいたわけで、戦場での経験は皆無に等しい。

「確かに俺は戦場の経験は長いですが、しかし艦の扱いに関しては

何にも知りません。ろくな判断を下せません。マリーさんは技師としてアークエンジェルを整備していたようですし、的確な判断を下せるでしょう。それに、俺はどのみち宇宙に出て戦わなくちゃならない。あなたが艦長をやるのが適任です」
「ならば、私よりもバジルール中尉の方が……」
「私もストレイト大尉に賛成です。私はこの艦についてはよく知りませんし、それにやはり艦長というのはそれなりに地位のある人間がやらねばなりません」
「まぁ、そういうことです。頑張ってください、マリーさん」
クーガーはまだ困惑気味のマリューに向けてそう言った。
マリューはこみ上げてきそうなため息を押し殺し、呟く。
「……マリューです」

その部屋には二段ベットがそれぞれ左右に設置されていた。真ん中は通路となっている。ドアから見て正面にはモニターが一つ。それ以外のものは何もなかった。
上段のベットで君島は横になっていた。天井に視線を向け、表情を曇らせる。
――俺たち、これからどうなっちまうんだ？
ヘリオポリスが崩壊した。住む家がなくなった。そして、家族も友人も安否がわからない。これからどうすればいいのか、君島達は誰にも告げられていなかった。ただこの狭いベットしかない部屋で、不安をかみ締める事しかできない。
――父ちゃんも母ちゃんも無事でいてくれよ……。
幸い、ヘリオポリスの退避シェルターは緊急時には脱出艇となる。恐らく、ヘリオポリスが攻撃を受けている最中に近くのコロニーに向けて射出されたはずだ。ヘリオポリスの残骸に巻き込まれていな

ければ、無事なはず。だがしかし、確信はない。
「君島くん」
君島の寝ているベットの下段から声が聞こえてきた。寺田あやせだ。この部屋には今、二人しかいない。かなみはカズマを探すために部屋を飛び出し、カガリはその後を追った。
「きっと、皆大丈夫よね」
今にも消えて亡くなりそうなその声。だから君島は精一杯の空元気で答えた。
「何言ってんですか！大丈夫に決まってますよ！」
だがその言葉に確信はない。
「そう……きっとそうよね」

――刻んでやる。
暗闇の中で、カズマは思う。
アークエンジェル内の拘留所。檻の中には、造られたばかりのトイレとベット、そして薄い毛布のみ。電気は消され真っ暗だ。
その場所にはカズマ以外、誰もいなかった。窓はない。外の様子を知ることはできない。
カズマは負けた。完全に敗北した。
攻撃は殆ど見切られ、唯一の反撃はあまり意味のない体当たり一つ。
真っ暗なその場所でカズマは拳を握る。
額には包帯が巻かれていた。そして腕や足にも。いくつもの傷を覆い隠すように、白いそれは巻きつけられている。
カズマは床に座り、壁にもたれかかっている。ひんやりとした床

と壁。暗闇の中で、足音が聞こえてきた。ドアの向こうから聞こえてくるそれは、少しずつ大きくなっていく。
部屋に光が差し込んだ。
カズマはその方向に視線を向ける。顔をしかめ、逆行の中でその人物を認識した。
「クーガーか」
「どうだ、カズヤ。頭は冷えたか？」
「カズマだ」
クーガーは仕官服を着てピンク色の派手なサングラスをかけている。包帯まみれのカズマの服は、革ジャンとジーパン。それらにはいくつもの真っ赤なシミがついていた。右手のグローブにもシミがある。
カズマの鋭い視線を受けて、クーガは笑った。
「目が覚めたと思えば、いきなり暴れやがって。お陰で医務室は荒れちまった。そういうところは相変わらずだな」
「アンタは変わったな。地球軍の犬なんかに成り下がりやがって」
カズマは怒りを籠めて吐き捨てる。
「これから俺たちはアルテミスに着艦する」
「ユーラシアのアレか」
「そうだ。そこでお前たちは下ろすつもりだ。民間人なんか乗っけてても、どうしようもないしな。アルテミスの傘もあるし、あそこなら安全だろうしな。ユーラシアも民間人に対して非人道的な扱いはしないだろう。何処か適当なコロニーに送り届けてくれるはずだ」
クーガーは淡々と告げる。その言葉に、カズマはかみついた。
跳ね上がるように立ち上がる。その両手で檻を掴み、顔を格子に当たるくらいまで接近させて、怒鳴った。
「冗談じゃねぇ！」
叫び声が部屋の中に響く。ドアは開けっ放しだ。遠くの廊下までその声は届いたことだろう。
「この艦を降りてたまるかよ。借りがあるんだよ。あの赤いＭＳの

パイロットにはな！借りを返さないでのうのうと生きるなんてできるか！俺は闘う。闘わせろ！」
カズマは負けた。完膚なきまでに叩きのめされた。
胸の中に滾るのは怒り。
自分を負かしたあの敵に対する怒り。碌な反撃もできずに負けた自分自身への怒り。
それを清算せずに生きていく。カズマの中にその思考は微塵もなかった。
「やっぱりお前は変わってないな」
「ああ！？」
「安心したんだよ。もう話はつけておいた。あのＭＳはお前のもんだ。地球軍にいる限りはな」
先程の会議でクーガーはカズマがストライクを使って闘う事をナタル、マリューの二人に了承させていた。どの道、アークエンジェルはそのうちアルテミスを離れ、地球軍本部にあるアラスカまで向かわなくてはならない。その過程で戦闘は避けられないだろう。ならば、戦力は多い方がいい。
「俺にクソ野郎共の犬になれってのかよ。忘れたわけじゃねぇよな。あいつらがどんな奴らなのか。胸糞悪い、クソッタレ共だってことをよ！」
「地球軍に従えとかそういう意味で言ってるんじゃない」
「何……？」
一瞬の静寂が流れる。
「お前はお前の為に闘え。それでいい。誰にも文句は言わせない。だから、その代わりに手を貸せ。ストライクをアラスカまで運ぶまでな」
「取引ってことかよ」
「ま、そういうことだ。お前がこれに乗るなら釈放。断るならこのまま留置。さて、お前はどうする？
」

クーガーの飄々とした物言い。カズマはそれに対し舌打ちをし、毒づいた。
「選択肢のない質問ってのは、最高にタチが悪い」
「じゃあ、決まりだな。二年ぶりだな。またよろしく頼むぜ、カズヤ」
クーガーはカードキーを取り出し、それを近くにある読み取り機に差し込む。カズマを遮る柵が横へとスライドして開く。
――刻んでやる。あいつに、俺の名を！
カズマはきつく、拳を握った。

## アルテミス　3（前書き）

アルテミスにまだ着艦できてない。どうしよう。

## アルテミス　3

カズマとクーガーは廊下を歩いていた。人が四人か五人くらいは通れる。
「あ、カズくん！」
唐突に、カズマを呼ぶ声がした。声の聞こえてきた方向に二人は顔を向ける。
ポニーテールの少女がカズマに向かって走ってくる。その後ろには金髪の少女がいた。
「か、かなみ？」
抱きついてきた少女の名前を、カズマは呼ぶ。
「カズくん、どこ行ってたの？　いなくなっちゃったんじゃないかって私、とっても心配したんだよ？」
かなみはカズマのジャンパーに顔をうずめる。手はカズマの腰に回されている。一瞬、カズマが顔をしかめた。傷を思いっきり圧迫された為だ。それでも無理をして、平気なフリをする。
「ちょっとした野暮用がよ。大丈夫だ。俺はどこにもいかねぇ。心配すんな」
そう言って、カズマはかなみの頭を撫でた。かなみはくすぐったそうに、けれど嬉しそうにしている。
「この子、お前の事本当に心配してたんだぞ。艦の中ずっと歩き回っててた」
カズマに語りかけるのは、金髪の少女だ。
「……お前、名前なんつったっけ」
「カガリだ。人の名前くらい、覚えとけよ」

不満を籠めたため息を、カガリはつく。
「お前は何でここにいるんだ？　」
カズマは問う。
「わ、私か？」
「お前以外誰がいる」
「カズくん、そんな言い方駄目だよ。カガリさんは、私と一緒にカズくんを探してくれたの」
カガリは照れくさそうに、あさっての方向を向きながら言った。
「一応、お前には借りがあし、あの時助けてもらったし……この子も心配だったからさ」
僅かに頬を赤らめるカガリを、カズマは怪訝そうな顔で見ている。その視線に気づいたカガリは、さらに顔を赤くしてカズマに詰め寄った。
「な、なんだよ！」
カガリの声が廊下に響く。その声にカズマは顔をしかめた。
「いや、別になんでもねぇよ」
「いいたいことがあるならはっきり言え！」
「何でもねぇって言ってんじゃねぇか」
「二人とも、喧嘩しないで……」
喧嘩というよりは一方的にカガリが一方的に突っかかっているだけなのだが、かなみの目にはそう映っているようだ。
カズマの元を離れ、かなみはカガリの元へと行く。カズマの代わりに謝っているようだ。頭を下げている。
「カズヤ、ちょっといいか？」
クーガーがカズマに声をかけた。
「さっきも言ったが、この艦はアルテミスに向かっている」
「ユーラシアってことは、あいつもいるのか？」
「そうだ。だからお前は一応、これを着けておけ」
クーガーがカズマに差し出したのは、サングラスだった。クーガーのレーサータイプのとは違い、黒い、普通のサングラス。

「俺は顔が割れているから別に構わないが、お前は違う。暴れるなよ？　問題起したら庇いきれない」
クーガーの差し出したサングラスを、カズマは奪い取るようにして受け取る。そしてそれを、無造作にポケットに突っ込んだ。
「わかってるさ」
「それならいい。よろしく頼むな」
クーガーは踵を返し、カズマに背を向ける。
その後姿を見つめるカズマの視線には、怒りと悲しみの入り混じった、複雑な感情が込められている。
「なあ、兄貴。アンタは本当にあいつらの犬に成り下がっちまったのか？　」
去ろうとするクーガーに、カズマは声を投げかける。
ストレイト・クーガーはカズマにとっての憧れなのだ。初めて会ったときから。共に同じ時間を過ごしていた時も。そして、今でさえも。
その男が、地球軍にいる。地球軍に従っている。そのことがカズマには耐えられなかった。だから問うた。クーガーの真意を確かめたかった。
しかし、サングラスをかけたその男は、笑いながら答える。
「さて、どっちだろうな」
回答をはぐらかし、クーガーは去っていった。カズマはその場に取り残され、やり場のない怒りがこみ上げてくる。
――兄貴、アンタは……っ！
力いっぱいに拳を握る。湧き上がる感情を込めて、それを壁に叩きつけようとして――止めた。
「カズくん、どうしたの？　」
カズマの拳をかなみが握っていた。カズマはその拳を解き、逆の手でかなみの頭を撫でる。
「大丈夫だ。何でもねぇ。何でもねぇよ」
自分自身に告げるようにカズマは言葉を繰り返した。無理矢理に

感情を押さえ込んで、かなみに接する。
少し離れた場所にカガリは立っている。かなみと同じく、しかしカズマを案じている。だがどのような言葉をかければいいかわからず、何も言えない。
「心配すんな。俺が大丈夫だって言ってんだ。だから、大丈夫だよ。信用しろよ。な、かなみ」
カズマはかなみの身体を抱き寄せる。かなみの顔が再びジャンパーにうずまった。
かなみはその暖かさに安堵しながらも、言う。
「無理だよ。だってカズくん、平気で嘘つくし約束破るもん……」
カズマは苦虫を噛み潰したような表情になり、その横でカガリは笑った。その場の空気が一瞬で消し飛んだ。
「何笑ってんだよ」
「いや、だって、お前さ……ふふっ、ははっ！」
「笑うなよ！」
カズマの叫び声を無視し、カガリの笑い声は廊下に響いていた。

# アルテミス　4

遠い昔。幼き頃の記憶。
緑溢れる農業プラント、ユニウス市の中。その居住区の公園。劉鳳は母親の膝の上で抱かれていた。周囲には何十人もの人がいる。中にはカップルや子連れの男女もいる。
「はずかしいよ、かあさま」
劉鳳は照れながら身をよじらせる。
「何言っているの。ついこの間まで、私と別れる時はいつも大泣きしていたのに」
「三年以上前のはなしじゃないか。もう、僕はそんなんじゃない」
「あら、そうなの。暫く会わない内に、成長したのね」
劉鳳とその母親である劉桂華（りゅうけいか）は普段、別々に暮らしている。劉鳳の父親、劉大蓮（りゅう）はプラントの政治家だ。母親は農業プラントの一区の管理を任されている。劉鳳は父親と共にプラントの首都と呼べるコロニーに住んでいて、母親とはめったに合う事はない。
三年ぶりの再会だ。父親の仕事に暇ができ、その休暇を利用しての事だった。
今度はいつ会えるのかわからない。父親も母親も、急がしい毎日を過ごしている。
「おお、劉鳳。どうしたんだ、そんな所で」
父親がやってきた。いつもは厳格な父が、表情を優しく綻ばせている。劉鳳がその顔を見るのは、父親が母親と会っているときだけだった。
「お前も少しは大人になったかと思ったが。まだまだ子供だな」
「違うよ、とうさま。かあさまが勝手に」
「恥ずかしがらなくてもいいのよ、劉鳳」

「だから……」
母親の膝の上で口を尖らせる劉鳳。その姿を見て、父親も母親も笑っていた。いつもは離れ離れでろくに顔もあわせていない。だが、劉鳳の目の前に確かにそれがある。
幼い劉鳳は、なるべくこの幸せが続けばいいと思っていた。

休暇が終わり、母親と別れるのは正直、辛いことだった。
父親はいつも仕事ばかり。家に帰ったら一人だけ。劉鳳はひとりきりだ。
「なんて顔してるの。また会えるんだから」
「……うん」
リムジンに乗り込んだ劉鳳は、弱々しく頷く。
運転席には使用人が座っていた。後部座席に乗るのは劉鳳とその父親。母親は外だ。車の中を覗きこんでいる。
「元気でな」
政治家や使用人相手には一言も使った事のない、心の底からの言葉。劉鳳は俯きながら、それを聞き取っていた。
「ええ。あたなこそ。身体には気をつけて」
「かあさま」
「またね、劉鳳」
母親のその声の後、父親が使用人に車を出すように告げる。車が動き出した。窓に映る景色が動く。母親の姿が移動していく。
劉鳳は膝を立てて窓に顔を近づけ、手を振る母親を見つめていた。
今度はいつ会えるだろうか。なるべく早いほうがいい。そんな事を考えている内に、母親の姿は見えなくなっていく。

アラームの音で劉鳳は目が覚めた。
ベットの横においてあった携帯通信機を手に取る。画面には「ミーティングルームに集合せよ」と記されていた。送り主はラウ・ル・クルーゼだ。
――懐かしい夢だったな……。
劉鳳はベットから起き上がる。
あの後、劉鳳が母親と会った回数は片手で数えるよりも少ない。
母親はユニウス市の農業区画の管理責任者を担うまでになり、父親はプラント最高評議会での地位を着々と築いていった。劉鳳自身も軍事アカデミーに入学して、忙しくなった。
そして、母親はもういない。一年前に亡くなった。
ユニウス市に打ち込まれた核ミサイル。後に「血のバレンタイン」と呼ばれる、最悪の悲劇。それに巻き込まれ、母親は塵一つ残らず消滅したのだ。
「毒虫共が」
怒りと憎しみを込めて、劉鳳は吐き捨てる。
地球軍の撃った核ミサイルが標的にしたのは、非戦闘員の、民間人だ。軍事的拠点などではない。地球軍が一方的に禁止している、「農業を行っているプラント」だったから。それだけの理由で、そこにあった数多くの命がなくなったのだ。
許せる事ではない。我慢などできるはずがない。だから劉鳳は戦っている。
そもそも、ナチュラルは勝手すぎるのだ。
世界には遺伝子操作の技術がある人物から公表されるまで、コーディネイターは存在しなかった。遺伝子操作記述を使って、ナチュラルがコーディネイターを生み出したのだ。
それなのに、それが自分たちよりも圧倒的に勝っていると知り、人として扱おうともせず、奴隷のような体制を強いたナチュラル。

コーディネイターを差別によって地球から追い出し、なお支配を行おうとしたナチュラル。
それが劉鳳には許せなかった。ナチュラルの、地球軍の行動には正義が無いからだ。
大儀はあるだろう。だがそれは建前に過ぎない。根本にあるのはコーディネイターとナチュラル、その違いだ。それだけの理由でユニウスセブンの惨劇は起こったのだし、戦争は続いている。反吐が出るほどに劉鳳はそれを憎んでいる。
劉鳳はコーディネイターが平和に暮らせる世界が欲しい。
父親と母親と過ごした、あの時間。僅かでも幸せだった、あの瞬間。それが永遠に続く、そんな世界。
それを手に入れるために戦っている。

「アルテミスですか」
橘がモニターを見つめて言った。そこにはユーラシア連邦の要塞の周囲の地図が描かれている。
「あそこには傘がある。実弾だろうがビームだろうが、何も通さない光の壁がな。あそこに逃げ込まれたら、手出しはできないだろう。厄介なものだよ」
クルーゼは口元に笑みを造りながら告げる。
ミーティングルームには十数名の兵士がいた。いずれもＭＳのパイロットだ。中にはヘリオポリスの戦闘でＭＳを失っている兵士もいる。崩壊前に何とか脱出した者たちだ。
「だったらさぁ、傘のシステム自体を破壊しちまえばいいんじゃねぇの？　何かしらの装置を使ってんだろ？　鉄壁つったって、所詮はメカだ」

最初に口を開いたのは立浪だ。
「そこは向こうもわかっている。光波モノフェイズシールドを維持する機器の周囲にはつねに監視があり、近づくものは速やかに対処されるだろう」
「しかし、こちらには奪取した新型ＭＳが四機もあります。ジンも七機ありますし、それにミゲルの専用機も修理が完了したと聞いています。見張り程度ならば戦力的にで圧倒できるのでは？」
橘が発言するが、立浪と同じく、緩やかに否定される。
「可能だろうが、あまり無駄な戦闘は行いたくない。目的はあくまで新造艦の破壊、及び新型ＭＳの奪取だ。ユーラシア連邦との正面衝突ではない。今の戦力では長期戦になればどうなるのか、目に見えている」
単純な戦力の話をすれば、ユーラシアと戦って今のクルーゼ隊が勝利できるわけがなかった。
個別の機体のスペックは地球軍のものを大きく上回っている。だが、総戦力はユーラシアが上だ。ヘリオポリスでのストライクとの戦闘がそれをさらに決定的なものにしていた。
「隠密行動しか道はない、と」
「その通りだよ、ミゲル」
モニターの図が動き出した。画面の端から戦艦が現れ、ＭＳを模したマークがそこから展開されていく。
「まずは傘の機能を停止させ、アルテミスに接近。恐らく新型艦、もしくは新型ＭＳが出てくるだろう。ミゲルの話では新型のパイロットはかなり血気盛んなようだ」
「問題はどうやって傘を停止させるかってことですかい？」
「ならば方法はある。目標を破壊するまでにレーダーに引っかからず、目視もされなければいいのならば、それに適したＭＳがあるはずだ」
それまで一言も喋っていなかった劉鳳が口を開いた。その隣に座っていたシェリスがそれに頷く。

「私のブリッツならそれができるわ。私が傘のシステムを破壊してしまえば、後はやりたい放題」
「なるほど。あそこは傘に絶対の自信を持っているから、必ず混乱が起きるというわけですね」
「そこを叩くってこったな。いいんじゃねぇの」
全ての兵士が納得した。他に方法が見つからない、というのもあるが。
作戦が統一された。後は実行に移すのみだ。ラウは立ち上がり、不適な笑みを造りながら告げた。
「ミーティングはこれで終了だ。あの新造艦と奪取できなかった最後の一機は、ここでケリをつける。諸君らの権能を祈る」

## アルテミス　5（前書き）

やっと、アルテミスに着艦できた……
やばいな、進むペースが

「上手くいくと思う？」
ミーティングを終え、自らの部屋に戻ろうとしていた劉鳳は、後ろから言葉をかけられた。その声の主はシェリス。ザフトの赤い軍服を加工したものを身に着けている。スカートの丈が通常のものよりも短い。
「何がだ」
「さっきの作戦。そんな簡単に誘いに乗ってくれるのかなって。新型に篭城決め込まれたら面倒じゃない
シェリスは先を歩く劉鳳と肩を並べて歩く。身長はシェリスよりも劉鳳の方が十センチは高い。必然的に下から見上げる形になる。
「それは問題ないだろう。こちらには遠距離ビーム兵器を搭載した機体がある。傘さえ破壊してしまえば、残るのは鉄の塊だ。一方的に打ち続ければそのうち落ちる。それくらいは向こうもわかっている」
「もし私が失敗したら？」
「それはありえないだろう」
はっきりとした口調で断言する。
その言葉を聞き、シェリスは笑顔を見せた。
「信用してくれてるんだ」
「なんだ」
僅かに身体を寄せてくるシェリスに、劉鳳は困惑した表情を見せる。

シェリスは残念そうに距離を元に戻した。
「……別にぃ。なんでもないわよ」
二人はその後、無言で歩いた。劉鳳からは何も喋らない。シェリスも自分から喋るつもりはない。ただ無言で艦内を歩く。
路地を三箇所ほど曲がった後のことだ。劉鳳が不意に口を開いた。
「ただ、気になる事がある」
「き、気になる？」
「あの白いＭＳのパイロットのことだ」
「ああ、そっち……ミゲルの言ってたバカね。知ってる？　そいつ、民間人のくせしてジンを奪ってザフトに盾突いたらしいわよ？　」
「そして、こちらの戦力を半数以上奪った」
劉鳳は前回の戦闘で対峙したＭＳのことを思い出す。
「あの白いＭＳの動きは奇妙だった。恐らくはＯＳがまだ書き換えられていなかったのだろう。その機体でジンを十機撃墜したんだ。あのパイロットは」
角ばった動き。最適化とは程遠い動作。歩くというただ一つの動作でさえ、違和感のある動きだった。直接的には全く関係のない、例えば腕を広げる動作と足を動かす動作、様々な動きと動きを組み合わせ、動いていた。
「あのＭＳにはフェイズシフト装甲が付けられているから。ジンの攻撃なんて、殆ど無意味。性能の差で勝ったのよ」
「もし、そうでなければ」
「ありえないわ。そうだとしたら、単純なパイロットの腕で私達の戦力を奪ったのだとしたら、その民間人は、訓練をつんだコーディネイター以上の力を持っている事になる。そんな事、ありえないわ。軍事アカデミーを卒業したコーディネイターが、民間人なんかに劣るなんて」
絶対の自信があった。確信とも言ってもいい。
コーディネイターは子供の頃から既に高い能力を持っている。ナチュラルが努力して可能になる事を、ほんの少し学ぶだけで達成す

る。だからこその自信があった。
自分たちが、民間人などに劣るはずがない、と。赤服を着ていようがいまいが、コーディネイターはコーディネイターなのだ。ザフト軍は地球軍と互角に渡り合っていることが、その優秀な力を証明している。
「……そうだといいが」
だが劉鳳の考えは違うらしい。疑問を抱いているようだ。
「考えすぎよ。あまり根詰めていると、疲れちゃうわ」
シェリスは自らスカートの裾をほんの少し、上げた。下着が僅かに見えている。
「どう。少し、私の部屋で休んでいく？」
だが、劉鳳はそれに対して全く興味を示さなかった。
「いや、遠慮しておこう。すまない。気を使わせて」
それだけ言うと、シェリスを置いて先に歩いていった。
残されたシェリスはため息をつき、すぐそこの自室の電子ロックを解除する。部屋の隅においてある、綺麗に整頓されたベットに、自らの身体をうずめた。
「もう、鈍感なんだから……まあ、そういうところがいいんだけれどさ」

劉鳳は一人で歩く。拳を握り、胸には決意を込めて。
――必ず、あの機体を捕らえてみせる。
全てはプラントの平和のために。劉鳳の望む、世界のために。

アークエンジェルから降りたカズマは、格納庫を見回し、呟いた。
「広いな」
アークエンジェルが余裕を持って収納できるその広さ。一キロは余裕であるだろうか。ＭＡが三十機以上配備されていて、戦艦も五機ほど見受けられる。
「へー。すっげえとこだな、アルテミスってのは」
君島が同じく感嘆の声を漏らす。日常では全く見ることのできないそれらに、目を奪われているようだ。
「それもそうだ。アルテミスはユーラシア連邦の本拠地なんだからな」
先を歩くクーガーが語る。
「光波モノフェイズシールド。外側からは一切の攻撃を受けないが、内部から外に攻撃を行いことはできる。今の所ユーラシアが独占している技術だ。最強の防御力を誇るこの要塞には、ユーラシアの全てがあると言ってもいい。気をつけろよ。下手な真似したら、威厳にかけて全力で殺しにくるぞ」
「あ、すんません。わざわざ心配していただいちゃって……」
「何やってんだ君島。別にへりくだる必要はねぇよ」
「そりゃお前、地球軍の大尉様となればこっちも多少は……って、カズマ、なんだそのサングラス。全然似合ってねーぞ」
「ほっとけ。事情があるんだよ。事情が」
「ただでさえチンピラみたいな奴なのに、もはやそれつけてるとヤクザみてーだ」
「だからほっとけって！」
カズマの声が格納庫に響いた。整備士の視線が全て声の主に集まる。
不穏な目を向けていた。敵対する敵兵を見るような、そんな目つき。
地球軍にとってユーラシアは友好国とはいえ、同盟国ではない。状況が変われば、いつ敵となるかわからない。だから、ユーラシア

の兵士たちも、突然の来客に対し、心を開いているわけではない。
「……あなたたち、私語は慎みなさい？」
マリューが感情を押さえ込みながら告げる。君島はそれにすぐさま謝罪の姿勢を見せたが、カズマはそうしようとはしなかった。
「おい、カズマ……」
「俺は地球軍の犬じゃねぇんだよ」
君島が促しても、それを聞き入れようとしない。

## アルテミス　6

重苦しい空気の中、一行は歩いていく。その中での地球軍兵士は、数名の下士官とマリュー・ラミアス、ストレイト・クーガー、そしてナタル・バジルール。先導しているのはストレイト・クーガー。着艦許可の礼と、補給の要請を申告する為に、アルテミスの責任者であるガルシアの所へ向かっている。その後ろをついていくカズマや君島達の受け入れを頼み込むためでもあった。カズマだけは、アークエンジェルを降りるつもりはなかったが。

一行は格納を出て、大型のエレベーターに乗り込む。それから十数分歩いた後、ロックの掛かった扉への前へとたどり着いた。扉の前には、二人の仕官がサブマシンガンを脇に抱えて立っている。

扉が今、開いた。向こう側から空けられたのだ。

「あなたたちはここで待っていなさい」

マリューはそう言い、クーガーとナタルを引き連れて部屋の中へと入ってく。

カズマは閉じられようとしていく扉の向こうに、頭髪のない角ばった顔の男がいるのを見た。それがアルテミスの長だと、直感的に理解する。偉そうな佇まい。見栄を取り繕うかのような大仰な軍服。その男と一瞬目が合う。

程なくして扉は音を立てずに、閉まった。

「……相変わらずいけ好かない顔しやがって」

「カズくん？」

険しい顔をしたカズマを見上げるかなみ。その声に気がつくと、カズマはその表情を解き、かなみの頭をなでた。

「いや、なんでもねぇ。気にすんな」

「お久しぶりです、ガルシア指令」
クーガーが恭しく頭を下げた。
「フン。貴様なんぞに、もう二度と会いたくはなかったがな」
それに対し、ガルシアはソファーに座ったまま答える。
「新造艦、アークエンジェルだったか。そして開発途中の新型ＭＳ。そんなものは始めて聞いたがな」
手に持ったパットを見てガルシアが吐き捨てた。パットには格納庫の映像が映されている。その中心には、アークエンジェルと白いＭＳ、ストライクの姿があった。
「友軍であるユーラシアに黙ってまで、大西洋連邦は我々を裏切る気なのかね？」
「その辺の文句は上に言ってください。俺たちは所詮、一般兵ですから」
まあいい、とガルシアは告げ、言葉を繋ぐ。
「用件は何だ。まさか貴様のような輩が、久しぶりに顔を見に来た、というわけでもあるまい」
「それについては俺の仕事ではないので。マリーさん、後は頼みます」
マリューが前に出る。今回は名前について、訂正しなかった。する状況でもないと判断したのだ。
女か、とガルシアが呟く。女の艦長というのは珍しい。よほど有能であるか、人望があるかのどちらかだ。マリューの場合はなりゆきというそのどちらでもないケースなのだが、ガルシアがそのことを知っているはずがない。
「アークエンジェル艦長、マリュー・ラミアス大尉です。突然の要求にもかかわらず、着艦を許可していただき、ありがとうございました。クルーを代表して、私が」
「建前はいい。無駄な事だ。私は友軍として当然の事をしたまでだ

からな。他にもまだ、要求というものがあるのだろう？」
　ガルシアはマリューの発言を遮って、ガルシアはきつく言い放つ。左手の指は苛立ちをぶつけるように机を叩いていた。
「補給をお願いしたいのですが」
「最初からそういえば言い。、遠まわしに言って体裁だけ取り繕えば、それで何でも許されるわけではないだろう？」
「……仰るとおりです」
　高圧的な態度に対して、マリューは表情をそのまま保っていた。ガルシアはその姿を見て、気に入らない、というように鼻を鳴らす。
「新造艦と新型ＭＳのデータを開示してもらおう」
　ガルシアはパットに、そしてその中に映るストライクに視線を落としている。
「それが条件というわけですか？」
「同じ地球軍ならば、何の問題もあるまい」
　同じ仲間。同胞。そうは言っても、マリューは即座に頷く事はできなかった。
　地球軍は一枚岩なわけではない。共通のザフトという敵に対抗する為に、共闘しているだけに過ぎない。ＧＴＡシリーズ、つまりストライクやイージスの開発を指示していたのは大西洋連邦。ユーラシア連邦ではない。
　もしも宇宙（そら）の敵との決着がついたのなら、即座にその相手は地球の中に摩り替わるだろう。その時の為に武力による優位性を確保したかったのだ。
「私の要求はそれだけだ。返答はいくらでも待とう。友軍として、そちらのクルーを歓迎しようではないか」
　体裁だけ取り繕えばいいわけでもない。全くその通りの言葉をガルシアは示している。何も隠さない。ただ、欲しいものがあるならばそれ相応のものをよこせと言う。他に選択肢を与えない。
　だが、ストライクの情報を開示するという事は、その時点でストライクの存在が無意味になってしまう。優位性が消えてしまうから

だ。
「言い返事を待っているよ」
何も言わないのならば、出て行け。つまりは、そういうことだ。
「……失礼しました」
マリューはそう言う他なかった。選択肢がない。どちらも選べるわけがない。もしもそうしてしまったのなら、ストライクを保有している意味がなくなってしまう。大西洋連邦本部より先に、ユーラシアにその情報を渡すわけにはいかない。
「ああ、そうそう、ガルシア指令。ここで民間人を数名、預かってくれませんか？何しろこちらはいつ沈むかもわからない艦なので」
クーガーの口からそれが告げられたのは、クーガーしかそう言えなかったからだ。ガルシアの要求を飲まない内に、マリューが新しく何かを頼む事はできない。階級がこの中で一番低いナタルが言うのもおかしい。マリューと同階級のクーガーしか、言える者はいないのだ。
「……良いだろう。民間人の部屋は、部下に案内させよう」
それだけが、唯一の収穫となった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6294u/

機動戦士ガンダムSCRYED

2012年1月6日01時49分発行